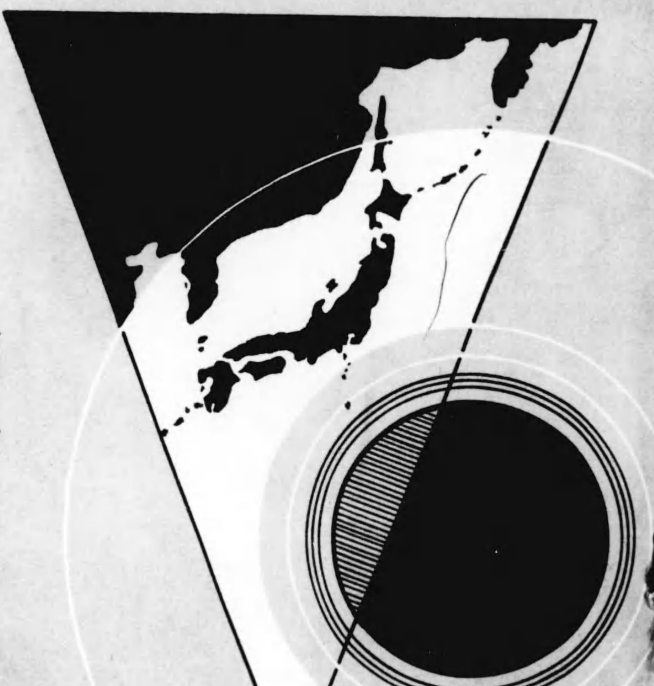
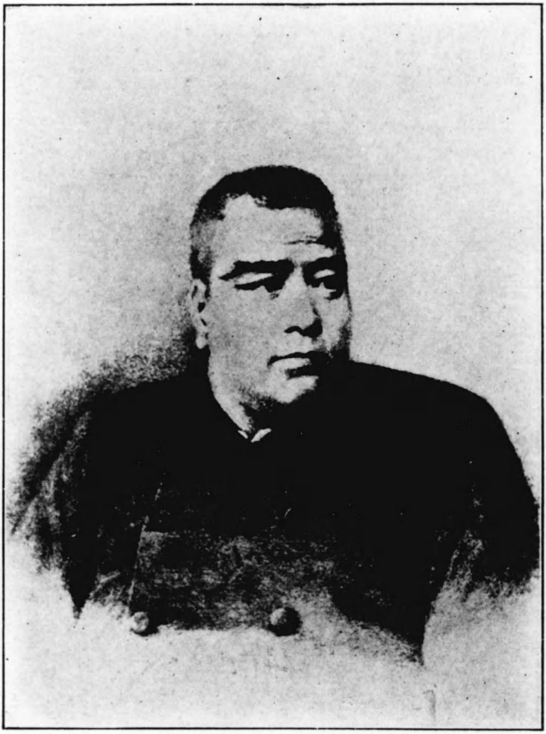
護國



國體擁護會

西　鄕　南　洲



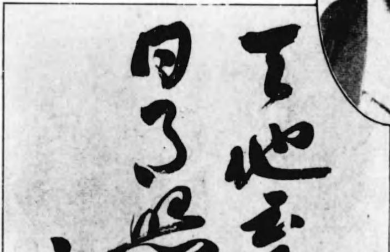
國士頭山滿翁



徐家
車匯

之之
沈山尚





頭山先生壯年時代及筆蹟


敬天
愛人

安達漢城閣下



我が國は特殊な國體である。他の諸國と建國の體制を異にする。國家成立の始原に遡るに、多くは人民があつて然る後に君主がある。君主は人民の擁立したものか、然らざれば人民を征服して自ら其の位に即いたものを例とする。我が國は全くこれに反し、皇室があつて然る後に人民があり、國家は皇室の經營によつて成れるものである。我が國體の基礎の特に鞏固な所以は此の點に存する。我が國が今日の如く次第に發展して來たのは、國體の優秀なるによるものである。上に萬世一系の天皇があり、下に忠勇義烈なる國民があつて、世々厥美をなせるは我が國體の精華である。歴代天皇の御盛業と忠良賢哲の事蹟とを説いて、愛國の至情を喚起し、此の國體の根源及び發達の經路を明かにするは、今日の文化の發達、民族の繁榮の由來を知り、益々國家の爲に盡瘁せんとするの志操を養ふことは、我が國民にとつて最も大切なことである。

國體擁護會

目次

勅語の精神……一
類なき我が忠君愛國の一致……三
我が國の家族制度と思想……四
マツソン秘密結社の正體……八
猶太民族の世界的大陰謀と我が國民思想惡化……八
マツソン秘密結社……一一
情婦に溺れたるため妻之を暴露す……一二
米國に於てマツソン秘密結社員集會の席上その首領のなせる演說の梗概……一二
自由、平等、友愛の高唱……一三
無神論物質文明と金力崇拜……一四
神秘的蛇輪……一五
獨裁君主制……一六
世界統一……一八
結論……一九

要求事項……二一
露西亞と西比利……二三
露西亞大使館より支那官權の押收書類の內容……二七
赤色大學教授の講義……二八
對日檄文（第三インター）……三三
日本を强盜呼ばはりしたる第三インター執行委員會の檄文……
亞細亞主義と西比利亞（亞滿蒙問題）の解決……佐藤知恭……三四
日本赤化運動の防止……三四
我々の進路（西比利亞を通じ赤化宣傳）……多賀宗之……四〇
西比利亞の自治獨立に就て……ウエー・モラーフスキー……四一
西比利亞の經濟問題……鳥井忠恕……四六
世界の日本……四八

○勅語の精神

「教育に關する勅語」は、もと教育社會に賜はれるものであるが、其の內容は、たゞ教育社會のみならず汎く我が國民の守るべき道德の大綱を示し給へるものである。この「教育に關する勅語」は實に我が國民道德の大本である。

故に我が國民道德を論ずる者は、「教育に關する勅語」を中心として考へなければならぬ。依つて左に其の趣旨を略述す。

「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」

我が國體が他國に比類のない美點を有することを明かにし給ふたものと思はれる。この御辭を最も平易に云へば、天皇陛下が御身親ら「朕が思ふに、我が先祖及び代々の天皇が、日本國をお開き遊ばされたお志は誠に廣大なもので、千萬年の後後まで遠くお考へ遊ばされ、我が國を建つるに大切なものは忠孝の二つにまさるものなしと思召めさられて、さては忠と孝との二つの德を、臣民の心の底にしかと留めさせ給ひたること、恰かも、樹を植うるに、深く根を埋めて厚く培ふが如く、堅固になされたのであるから、我が臣民はよく此の忠孝の道を守り、日本國民皆心を一つにして世々忠孝の美德をあらはして來たのである。これは我が國柄の最も立派な所以で、教育の大本とする所も畢竟此の忠孝の二つを教ふるにある。」と宣へるものである。

抑、忠孝の大道は、開闢の始めから、千萬年の後までも移り變らぬもので、これあるが故に國も開け、世も治まり、人々其の所を得て今日に至れるものである。天皇陛下が勅語の始めに於て、特に、忠孝の二つを訓誡し給ひし御聖旨もこゝにあることゝ思はれる。

「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ナル臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」

天皇陛下が吾人日本臣民の守るべき道德の大綱を示し給へるものである。父母に孝行を盡さなければならぬ。兄弟姉妹は仲よくしなければならぬ。夫婦はよく和合して互に親み愛するがよい。朋友は互に信實を以て交ることが肝要である。人は驕り高ぶらず萬事控目にして儉約を旨とせよ。已れの身に緣近き人々を愛するのみならず、緣遠き人をも愛し、更に進んでは、禽獸蟲魚に至るまで生あるものには、情をかけるがよい。無學で智惠が開けず、人の道もわからないやうでは、人と生れたかひもないから、幼少の時から學問を勵み、人として大切な德を守ることを忘れてはならぬ。一身の修まれる後は、進んで世の爲め人の爲めになる公益の事業を爲して、國家社會を益、進歩發展せしめることを心がけなければならぬ。兵役に服すること、租稅を納むることは、云ふまでもない。如何に些細な事でも、法律で規定せられて居る事は、必ず違背してはならぬ。また國家の事變に臨んだ場合には、身命を抛つても國家の爲めに盡さなければならぬと。我等の踐み行ふべき道を細々と教へ給へるものである。

「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

前述の道が今日偶然に生じたものでなく、歷代の天皇の遺し給へる訓誡であるといふことを明かにし、此の訓誡は、時の古今を問はず、洋の内外を通じて行はれる天下の大道なることを仰せられたのである。而して、天皇陛下には御身親ら臣民と共に此の御遺訓を服膺せんことを誓はせ給ふたのである。優渥な御聖旨が文字の上に滲み出て居る。

○類なき我が忠君愛國の一致

忠君愛國の一致は、我が國民道德の特色とも稱すべきものである。我が國に於ては、忠君と愛國とが常に相結合して離れない。君に忠なればやがて國土を愛することとなり、國家の爲に盡せば、卽ち君に對して忠義となる。我が國はもと皇室の御經營によつて成れるものであつて、諸外國の如く、多くの人民が集つて、其の中から統治者を選擧したものでない。また權力ある者が、他の國を滅ぼして、其の領土を奪ひ取り、自ら主權者となつたものでもない。或る家族が己の一族を率ゐて他郷に移住し、荒蕪の地を拓いて新しい國を樹てたやうに、天祖が自ら此の國土を開いて、國の基を定め給へるものであつて、世々の天皇は何れも天祖の意志をついで、臣民を赤子のやうに愛撫し、國事の爲に心を盡し給ふたのである。我が國が今日の如く盛大な國家となつたのは、皇室の御經營がよろしきを得たからである。故に我が國に於ては、國家と皇室との存在が別々に離れて居ないのであるから忠君愛國の相一致する所以はこゝに存するのである。諸外國の中には、往々忠君と愛國とが衝突して、國を愛する爲に君主を放伐し、或は君主の爲に、國家の休戚を犧牲に供するが如き例もあつた。かゝる國國と我が國とを比較すれば、其の國がらの相違することは自ら明かになるのであらう。

世界の國々の中には、我が國の如く、主權者の經營によつて起れる國もあるが、永い年代を經る間に、或は外敵の爲に侵略を受け、或は內亂の爲に統治者の交替となり、いつしか忠君と愛國とが一致しないやうになつたものが多い。我が國の如く、建國以來三千餘年の間、皇統が連綿として續き、建國の態様の變らぬものは殆ど全世界に類例を見ないのである。かくの如き歷史上から考へても、我が國家が皇室と離れ離い關係を有して居ることは明かである。我が國の如く、皇室を中心として永い年代の間繼續的に發展して來た國に於て、始めて忠君と愛國とが一致するものであるから、忠君愛國の一致は、世

界に存在しない我が國民道德の特色の一であると云ふことが出來る。

然らば如何なることをなせば君に忠となるか、また國を愛することとなるか。君主を尊敬し、其の命を奉じて違はざるは直接の忠である。國家の歷史風土を尊重し、國家の意志たる國憲國法をまもり、文化の發展をはかり、外敵の侵害を防ぐは、直接の愛國である。

されど、忠君愛國は、これのみで十分とは云ひ難い。眞に忠君愛國の美德を完うするには、よき國民とならなければならない。即ち、日本にあつては、よき日本人とならなければならぬ。

よき國民とは、總ての道德を其の身に體する者を云ふ。即ち、人として踐み行ふべき道德を盡くあやまらず守る者にして、眞に君に忠なる國民と云ひ、國を愛する國民とも云ひ得る。されば、忠君愛國は總ての德目を總括するものであると云つてよい。

○我が國の家族制度と思想

家族制度とは「家」を單位とする社會組織を云ふのである。即ち、一族の者が集つて「家」をなし、家の中に家長を設け、家長が統率する所の制度である。

東洋に於て最も完全に家族制度の形式の殘れるは我が大日本帝國である。我が國の家族制度は其の起原が頗る遠く、古代に此の制度の存在せる形跡がある。即ち、古代に於て行はれた氏族制度の如きは一種の家族制度とも認むべきものである。

我が國の家族制度は、祖孫相續の精神を中心とするものであるから、それが爲に、祖先と子孫との間に、一の系統的觀念を生じ、祖先は子孫の繁榮を望み、子孫は祖先に對して敬慕の情を起し、祖先の意志を尊重して益々これが發展をはかるに

至る。祖先崇敬の思想は家族制度の隨伴するものである。

家族制度は綜合家族制度と個別家族制度とに分たる。我が國の家族制度は綜合家族制度である、綜合家族制度は必ず個別家族制度をも含むものであるが、個別家族制度は必ずしも綜合家族制度ではないのである。此の綜合家族制度を國家組織の形式として見た時には、これを族制的國家と名づける。

我が國の社會組織は綜合家族制度であるから、同時に個別家族制度をも含んで居る。個々の家に家長といふものがあつて、其の家を支配するが如く、國家には其の領域内の家を總括して統一する所の大家長がある。卽ち萬世一系の天皇がそれである。かくの如く、我が國は國家全體が一の大なる家の形式をなし、天皇は家長に當り、國民は家族に當つて居る。これが我が家族制度の一大特色である。かくの如き社會組織をなせる國は、現今の地球上に、我が國より外には其の類例がないのである。

西洋諸國の家族制度は今日では全く其の跡を絕つてしまつたが、古代に於て明かに存在してゐたのである。中にもローマの家族制度は最も整頓したものであつた。古代ローマに於ては家長の權利が頗る强く、家族は家長に對して全然無力であつた。家族は常に奴隷の如く、何事によらず、家長から絕對的の服從を命ぜられるのみならず、時として生殺の權さへも左右せられて居た。さればローマの家庭は服從を敎へる學校であるとも稱せられた。ローマの子女が家庭にあつて養はれた服從の習慣は、長じて國法に遵ふ精神の根柢となつた。ローマの國民が法治國民として最も必要な遵法の精神は、家庭に於ける服從の習慣によつて養はれたものと云つてよい。而して、ローマの國民が近隣の諸國を征服して大帝國を建設したのは、質素にして勤勉なことゝ、私情を顧みずして國法に遵ふ精神の强固なことゝを有力な原因とするものであるから、ローマ帝國の發展は家族制度の賜であると云ふも過言でない。然るに幾くもなくローマの家族制度は崩壞した。其の理由の重なるもの

を擧ぐれば、第一に社會の事情が家族制度の維持を困難ならしめたことである。卽ち商工業の發展につれて利己的觀念が强くなり、交通のひらけ行くに從つて、都會に集る者が次第に多くなり、以前の如く家族的生活を營むことが不可能になつたのによる。また當時は諸人種の移動が行はれた爲に、ローマ人の血液が混亂して家の觀念を薄弱ならしめたことも一の理由である。第二には思想上の影響が家族制度の根柢を破壞した。學術や文藝の進步と共に、自由の思想を重んじ、個性を尊重し外部の權威を輕んずるの風を生じたので、家長の絕對的權利を認める家族制度の精神は衰退せざるを得ないのである。當時尙ほ此の思想上から家族制度に大打擊を加へたものは基督敎である。基督敎は家族制度と全く相反する平等主義、個人主義を唱へ、家族制度の精神を根柢から破壞した。

家族制度を失つたローマは、國力が次第に衰へて、また昔日の面影もなく遂に北方に起れる日耳曼民族の侵略を受けて、これに抵抗することを得ず、さしもに奇蹟の如く發展した廣大な大帝國も、一朝にしてあと方なく瓦解してしまつた。ローマに代つた日耳曼民族は、文明の程度が甚だ低く、却つて、己れの征服したローマの感化をうけ、ローマの文明を傳へて、近世文明の端緒をひらいたが、遊牧民族の常として、定まれる故鄕もなく、祖先崇敬の觀念もなかつたので、家族制度の精神は、ローマの滅亡と共に、全く歐洲の天地から消滅してしまつた。

今日の世界に於て最も完全な家族制度の存するは我が國のみなるが、近年に至つて我が國の家族制度も次第に破滅して行く傾向を示しつゝあるは歎はしき事である。

我が家族制度破滅の特に有力なる理由と見るべきものは、家族制度と相反する社會の風潮である。個人主義の風潮及び社會主義の風潮の如きものがそれである。個人主義の風潮が家族制度を破壞することは、ローマの家族制度が基督敎に毒せられて、遂に跡方もなく滅び去れることによつてよく證明せられる。今や個人主義は我が國のあらゆる社會を風靡して來た。

輓近に於て、我が國にかくの如く個人主義の流行して來たのは、社會の事情が個人主義の普及を容易ならしめたこと、及西洋文明の移入と共に、個人主義の思想が入り來れることによるものである。

社會主義も亦近年我が國に漸次流行の勢を示してゐる。個人主義が次第に猛威を逞うしてゐる時、これと全く相反する社會主義の起り來れる個人主義普及の反動である。社會主義の勃興は、個人主義の弊害を語るものである。個人主義の發達と共に個人と個人との間に自由競爭が次第にはげしくなつた、其の結果は貧富の懸隔や社會の不平等を生じ來つた。かゝる時社會主義は不平等な社會の中に起る反抗の聲である。

個人主義も社會主義も、共に家族制度を破壞するものである。家族制度は團體本位の思想を基礎として成立つもので、個人主義とは全く其の根柢を異にしてゐるから、其の長所と短所とが全く相反するものである。家族制度の長所は個人主義の短所であり、個人主義の特長は家族主義の弱點である。家族制度は動もすれば家長の權力が過大に失して、家族の人格を認めないことがあり、或は家族相互に依賴心を生じ、獨立自尊の風に乏しい缺點がある。これらの缺點は、個人主義の長所を採つて矯正しなければならぬ。これに反し社會主義は團體を本位とする點に於ては、家族制度と相等しく、家族制度は一種の社會主義であるかの如く見えるが、其の精神に至つては非常に大なる相違がある。社會主義は團體をなす各員の間に區別を設けず、盡くこれを平等と認めるものであるが、家族制度は、家長が一家を支配する制度である。一家の中には父母もあり、兄弟姉妹もある。其の間には長幼の序があつて、嚴格な階級的區別を存してゐる。また社會主義はもと社會の不平等を矯正する爲に起れるものであるから、社會主義が私有財產の撤廢、生產事業の公共的經營を叫ぶのは、かくの如き方法によつて、個人は最も幸福な生活をなし得るものと認めてゐるからである。然るに、家族制度は祖孫相續の精神から成れるもので、祖先の遺志をついでこれを子孫に傳へ、あくまでも團體としての發達を全うするを目的とし、其の間に少しも利己的の

思想を含んでゐない。これ家族制度と社會主義とを區別すべき點である。

社會主義が團體を本位とするは、家族制度の本旨と合するものであるが、其の階級の區別を認めないこと、個人の利益の爲に團體生活の必要を叫ぶこと等は、家族制度の精神と相反するものである。故に、我が家族制度を擁護する爲には、これ等の缺點に感染せしめないやうにすることが肝要である。

忠孝一本、祖先崇敬等の如き特色のある國民道德は、我が特有の社會組織たる綜合家族制度から出て居る。我が國が今日の如く發達して來たのは、云ふまでもなく、我が國民道德の優秀なことに原因してゐる。而して、其の優秀な國民道德の胚胎する所は、綜合家族制度の社會組織によるものであるから、家族制度は卽ち我が國家の基礎を强固ならしむるものである。從つて、家族制度の崩壞は國家衰滅の兆候と云つてよい。ローマ大帝國が家族制度の社會組織を失つて、其の宏大な版圖を瓦解せしめたことは、我が國民の反省を要する殷鑑である。

されば我々國民は國運の進步發展を期し、力めて我が家族制度を維持する方法を研究する必要がある。古來の家族制度を其のまゝ固守するは、時勢の進步と相容れないものである。何となれば、古來の家族制度には、多くの長所があると共に、又短所も尠くないからである。故にこれが長短を論じて其の改善を計り、國運の發展に勸めねばならぬ。

○マツソン秘密結社の正體

猶太民族の世界的大陰謀と我が國民思想惡化

我が國民思想の惡化については、種々の原因があるけれどもその主なるものは猶太人の陰謀より來るものである。玆にかて吾人は猶太人が何故にかゝる世界的陰謀を企圖するに至りしか、その今日に至る歷史、手段方法並にマツソン秘密結社員

の席上に於てその首領がなしたる演說の原稿中最も重要なる一部を摘錄して大和民族たる我等は如何なる方法を樹てゝ之等に對應すべき哉大決心をなすべき參考資料に供せんとするのである。先づ何故に猶太民族が斯くの如き世界的大革命の陰謀を企圖するに至りしかに就て述べてみやう。

猶太の祖國は往昔亞細亞と歐羅巴と阿弗利加の中間に位し地中海に面した所に一國家を成して居たもので面積は我が九州位のものであつたが、今より凡そ二千年前にバビロニア國王ネブカドネザルの爲めに國を亡ぼされ、猶太人は四散して亡國の悲哀を感じつゝ流浪の民となつたのである。此の流浪の民となつた猶太人等は如何にして復讐すべきか如何にして大猶太國を再建すべきかと云ふ事について考へた結果、『金の力』卽ち黃金の威力を以て凡ての目的を達成するより他に方法がないと云ふ事に歸着したのである。そこで何れの地に移りしものも金を貯へるに汲々として、金の爲には如何なる手段も選ばず、又如何なる迫害にも屁古垂れなかつたのである。故に何れの國に於ても彼等は嫌はれて仕舞には逐ひ出された。時には殺される事もあつた。彼のコロンブスの亞米利加發見の如きは西班牙に移住した猶太人が同國の壓制を受けた爲め他に住む可き地を搜さんとして有志を募つて出かけた一行である。斯の如く何れの國に於ても壓制を受け虐待された爲、彼等は深く怨を抱き、他日目的を達成した曉は他の民族に對し復讎しやうといふ觀念が愈々、深刻になつたのである。

爾來彼等は營々として黃金蒐集に努力した、その結果現在では世界の富の七割は彼等の掌中に占められて居る。世界屈指の大富豪は皆猶太人である。米國のモルガン、シツフ、ロツクフエラー、ゴツケンハイム、カーネギー、セルグマン、アルトマン、英國のロスチヤイルド、モーリスヒルシユ、佛國のカモンド、フオールド獨のスチンネス等皆然り、單に富豪だけではない。世界の醫師と辯護士の大部分は猶太人である。例へば匈牙利では辯護士の九十五パーセント、醫師の九十パーセントは猶太人である。獨逸でも醫師は獨逸人一人に對し猶太人八人の割であり、紐育では辯護士の六割は猶太人である。又

世界の大政治家中にも澤山ゐる。米國第二世大統領アダムスの如きは純猶太人である。其の他各國の政治家の氏名の如きは一々枚擧に遑がない。そして彼等は凡て猶太敎なるものを信仰してゐる、その經文の中に次の如きことが書いてある。

一、猶太人は神の撰民である他の民族は魂のないゴイ(豚)である。

一、世界は猶太人に屬すべきものなり。此を占領するため、猶太人は如何なる假面を蒙るも不可なし。

一、諸國の王の冠は悉く猶太人の前に落さる。

一、諸國の金庫は凡て猶太人の足許に集めらる。

彼等はこの經文を金科玉條として固く信じてゐる。そして世界が此の經文の敎へ通りになることを信じてそれに向つて驀進してゐるのである。

卽ち王の冠が落されるといふ信念から先づ帝制國家の破壞に着手した。最初に手を着けたのが露西亞であつた。隨分長年月を費したが玆に彼等の爲に露帝國は破壞された。そしてロマノフ皇帝は弑せられ、玆に彼等の目的は立派に達成せられたのである。彼のレーニンの如きは全く彼等の傀儡となつて働いたのに過ぎない。次ぎに獨逸や墺太利が歐洲大戰で敗れて共に帝制を破壞せられたのは種々原因はあるだらうけれども、その最重大原因は猶太人が內部から崩壞を策した努力が奏効したことである。卽ち例のヨッフェーが獨逸に滯留して大いに策動したことなどは見遁すことの出來ない事である。

次に彼等は英國と伊太利に手を着けたが英國では彼等の陰謀を看破せし爲その毒手を恣まゝに揮ふことが出來ず、未だにその目的を達することを得ずしきりに苦慮してゐる。又伊太利に於ては殆ど目的達成の域迄進んだが快傑ムツソリーニの爲に九仭の功を一簣に缺かれた觀がある。

一方東洋に延ばした彼等の魔手は隣邦支那を思ふ存分攪亂した。そして我日本に及んで來たのである。彼等は日本を征服

する爲に次の六ケ條に最も力瘤をいれてゐる。

一、日本國民を欺瞞し自由、平等を唱和せしめ、秩序ある統一を破壞すること。

二、階級鬪爭を誘起せしむるため勞働運動を鼓吹すること。

三、淫蕩文學を鼓吹し國家發展の基礎たる節操觀念を失はしめ内部より崩壞に導くこと。

四、皇帝の保護及愛國心の涵養に任ずる軍隊を廢止することに努力すること。

五、當路の大官と權威ある言論機關を買收すること。

六、政黨の軋轢その他各種の内訌を助長せしむるため不平分子を懷柔して革命の動機を醞釀せしむること。

右の方法によりその目的を達するため莫大なる黃金を送りダンス舞踏を流行せしめて淫蕩氣分を旺にし其の他百方手段を盡してゐる。兎に角彼等は經文の信念と復讎の觀念から發してゐるので、その熱心は驚くべくその熱烈と執拗とは想像以上である。彼の歐洲大戰四ケ年間の犧牲者は九百萬人であるが、猶太人が露西亞革命のために慘殺した生靈は實に二千萬人の多きに及んでゐる。更に革命より來りし饑餓疫病の爲に一千三百萬人を失ふてゐる。この一例を考へても彼等が目的遂行の爲には如何に手段と方法とも選ばず、慘虐を極むる毒手を揮ふてゐるかを知るに足る。

△マッソン秘密結社

猶太人は今より二千年前バビロニア國王ネブカドネザルの爲に國家を亡ぼされてから世界の漂泊民族となつて到る處で壓制と迫害と虐待とを蒙りつつも根强く執念深く之等に對抗しつつ、遂に彼の有名なマッソン秘密結社を組織して世界各所に散在して刻苦、勉勵し財を蓄へ、富を作り相互の秘密の連絡を固く守り、凡ゆる手段を講じて世界的大復讎を企てこの陰謀

遂行の爲には全力を擧げ努力してゐるのである。彼等の目的の眼目は前にも述べた如く世界に於ける國家組織を破壞し盡くして共和思想を注入し、その混亂に陷るに乘じて黄金の力を以て世界を征服し之を支配して以て猶太民族の天下たらしめんとするにある。

△情婦に溺れたるため妻之を暴露す

彼等にはマツソン秘密結社の決議書なるものがある。この決議書は極秘で萬一之れを他に漏した者は秘密の裡に仲間の者から殺されて仕舞ふと云ふことである。

斯る極秘のものが朧氣ながらにも如何にして世界に知れたかと云ふに、去る大正八年頃米國に於けるマツソン秘密結社の首領が情婦に溺れて妻を顧みなかつたゝめ、其の妻が激怒の結果右の秘密書類を盜んで佛國に逃げ、當時佛國に滯在してゐた露國の大地主に賣り夫れを露國で出版したが、この事實を知つたマツソン社では莫大な金で之を買收して非猶太人の手に渡さない樣につとめたものである。所が多少回收のつかなかつたのがあつた爲め世界に知られたのである。

今回吾人は計らずも或る事情の下にその一部を手に入れることが出來たので之を天下の諸君、憂國の同志に發して共に研究し共に對策を講ずる資料とする次第であります。

○米國に於てマツソン秘密結社員集會の席上その首領のなせる演説の梗概

△自由、平等、友愛の高唱

吾人が自由、平等、四海兄弟なる標語を民間に放つたのは既に古代のことである。夫れ以來これ等の語は幾度となく鸚鵡返へしに復習されてゐる。其の鸚鵡は此好餌にとび集り之を啣へて去ると同時に、世界の幸福を破壞し眞正なる個人の自由を破壞した。所謂智識階級の猪口才な人は之等の語の抽象的であることを知らぬ。其の意味の矛盾と調和とを知らぬ、又自然界には平等なく自由の有り得べからざることや、自然界に於ける智識才能の不平等が自然の大法則であることを知らぬ。

自由平等同人といふ言葉は諜者が之を世界のすみずみにまで宣傳した。幾千萬の民衆は吾人の陣營に投じ來り此旗を擔ぎ廻つてゐる。然るに實際は此標語が到る所に平和と、安寧を破壞し、國家の基礎を顚覆して歐米人の幸福を侵害する獅子身中の蟲である。是れが吾人の勝利を助長したと云ふことは諸君が後日首肯せらるゝであらう。權利を愛するものを刺戟して權利を濫用せしむるために吾人は獨立解放といふ我儘な出張を皷吹して凡ゆる勢力を對立せしめた。自由といふ抽象的な標語は何者を民衆に與へたか、政府といふものは國家の持主たる人民の手代に過ぎないから破れた靴の如く之を委棄交代せしめることが出來るものだといふ觀念を與へた。人民の代表者〇〇〇〇〇〇政府を交代し得るといふことが、即ち吾人に其代表者を左右するの機會を與ふるものである。

若し人間に自由を與へて或る年月之に自治を許すならば放縱に流れるに極つてゐる。それから內亂が起る。團體的戰爭も起る。次第に國家は紛亂して國家は無くなる。自由主義によつていろいろの權利が主張せられ要求せらるゝに從つて、國家と法律との力が段々に減殺せられる。吾人はかゝる國家に新權利を獲得し之を支配する。斯くして彼等は自由と我儘とによりて實權を我等に明け渡すことになり、我等は之を受け取つて彼等を壓制してやるのだ。吾人は各國民に對しては極力自由主義を皷吹するけれども、吾黨內では絕對的無言服從である。

吾人の天下となつた時、國民學校で敎へねばならぬことは唯一の學問―學問中の學問―そは何か。人生の組織と分業とを

有する社會組織である。換言すれば、人間を階級に分たねばならぬと云ふことである。平等は有り得べからざるものであることを各自が記憶せねばならぬ。何となれば各自の行動の價値が異つてゐるからである。

眞の自由は放從な我儘をする權利ではなく又人間の力と眞價とは良心の自由平等などの如き破壞を主張する權利にあるのではない。

又個人の自由とは烏合の集會場が駄辯を弄し自他を混亂させる權利ではない。眞の自由は公共生活の諸規則を守る人の不可侵權であり、又人の眞價は自分の權利と同時に無權利を自覺するにあるもので、自己といふ問題にのみ沒頭して空想を描いてはならぬ。

無神論物質文明と金力崇拜

自由が若し敬神を根據としての四海同胞主義であるときは、國民の幸福を阻碍することなく、國家を組織して行くことが出來る。斯る宗敎と信仰とを持つてゐる時は、人民は地上に於ける神の攝理に從ふ敎會に統御せられ、甘んじて溫柔な精神の父なる牧師の命に從ふものである。夫れ故に吾人は宗敎の根柢を覆へし世界人類のうちから神の觀念を拔取り、之に代ふるに打算と數理的要求とを以てせねばならぬ。

斯くすれば社會を指導するものは唯打算、卽ち金力のみになり、金力が與ふる物質的快樂のため金力のみを崇拜することになる。そうなると各國の下層民は至善に勤むるためでもなく、又富のためでもなく唯上流社會の傲奢に對する憎惡から吾人に服從して、吾人の競走者たる上流社會の權力を奪はんとすることになるのだ。

吾人は文明進步と云ふ一語を以て各國民を惑はせて大に成功したではないか。各國民の內には物質文明の外進步といふも

のなしと思ひ進步なる語が却つて眞理から彼等を遠ざける好餌たることを知らない。神樣は斯くして眞理の保護者たる吾人の他、誰にも眞理が見えない樣に巧みに蔽ひかくしてしまふのである。

吾人は世界統御策は歴史的の經驗や時々刻々の注意深い觀察から來るものである。

歐米一般の人々は公平なる史的實驗を基礎としないで唯理論的迷路を辿つて、其結果に對して少しも批判的態度をとらない、是れ彼等の恐るゝに足らざる所以である。彼等は當分歡樂に耽るがよい。新歡樂を空想するがよい。又吾人が與へたる科學の命令を金科玉條として遵奉するがよい。吾人は出版物の力を惜りて絕えず科學に對する絕對服從を鼓吹せねばならぬ。彼等の識智階級は其智識に誇るがよい。吾人の隱者が組立てた學問を彼等に應用させるのだ。

判りきつた虛僞の學說を吹聽して吾人は各國の青年を惑亂させた。尙吾人は最も嶄新に最も進步的に見へる學說の製造に人心を向はしめねばならぬ。昔は宗敎が國家を統べた時代もあつたが、現今は金力が支配者となつてゐる。吾人の動力は金力である。

神秘的蛇輪

今日諸君に報告したいと思ふのは吾人の目的が早や完成に近づいたことである。剩す所は僅少だ、今や神秘的の蛇輪を完成せんとしてゐる、此輪が結び付いたならば歐洲諸國は最も强靱なタガで締付けられたやうになるのだ。世界列國の同盟は一時我等に對して對抗し得るかも知れぬが、是れも敢て恐るゝに足らぬ．何となれば吾人は二千年もかゝつて各國民の間に拔くことの出來ない、分離の根をはらせてある世人が事の眞理を知らば事の未だならざる以前に兵力に訴へて吾人を攻擊するだらうと云ふかも知れぬが、其れも準備がしてある。如何なる勇士をも戰慄させる恐しい計畫がある、それは地下鐵道だ、

地下鐵道は遠からず各國の首都に通ずる。國家の政治機關と書類とは一時に爆發されてしまふ。

吾人の牒者は上流下流ノンキナ行政官階級、著述家、出版業者、本屋、番頭、職工、馬車屋、家僕其の他のものである。吾人は世界各國に調査感化の機關たるA座を設ける。各座には革命主義の分子を悉く糾合する。座員は各階級からなる。彼等は政治的陰謀を起すものである。吾人の手中には現代の一大威力たる金力がある。二日間でもつて吾人は如何なる大金でも秘密金庫から取出すことが出來る。

各國の重なる言論機關は既に吾人の掌中にある。吾人は之を丈夫な手網で操縱する、今や吾人の權力外に二三の權力が殘つてゐるばかりだ。他は悉く掃除してしまつた、現に吾人の道路には何の障害もない。吾人の超越政府は正に超帝權の資格を具備してゐる。目下吾人は世の立法家といつて差支ない。裁判と警察權とを行つて活殺自在である。

獨裁君主制

吾人は自由主義たる毒を吾人の敵なる諸國に注射した。諸國は不治の病にかゝつて今や煩悶してゐる最中だ。リベラリズムから憲法政治が生れて、此政體も運用を巧みにせないと唯紛擾、爭論する無益の學校となつてしまふ議會の辯論は刊行物以上に王者の行動と勢力とを殺ぐものだ。

濱の眞砂の樣な饒舌家は國家と政府とを古戰場と化してしまつた、大膽な新聞記者無遠慮な政論家は、毎日行政官を攻擊する五里霧中な群集のため、結局萬事は顚倒するだらう。

吾人は民衆のため名のみで實のない權利を憲法へ入れた。吾人が食卓の上から投げ與へるパンの切れと、吾人の命令との外に下層の人民は憲法政治から何者を得ることが出來たか。

民衆と云ふものは詰らない意地や迷信や或は子供に等しい理屈に囚はれて動もすれば黨爭を惑起し、判りきつたことでもなかなか一致しないものである。彼等は政治上の秘密を知らないから、何んでも多數決といつた樣な愚にもつかないことで決議して遂には無政府の種子を蒔くものである。

歐洲の諸國にも漸く共和時代が出現して政治上の倚形兒たる大統領が出來た。大統領は吾人の手足たる民衆に選擧させるから結局彼も吾人の命を奉じて働かねばならぬやうになる。

吾人は大統領に新憲法を制定させ吾人の掌中に立法能力を收めてしまふ。共和制は貧乏人にとつては痛々しい皮肉ではないか。何となれば日々の衣食に追はれるから、自分の權利を利用することが出來ないで雇主或は仲間の罷工に左右せられて確實な常收入を失ふことになるからだ。

唯獨裁君主のみが諸般の計畫を統一して國家機關の上に按配し、秩序をたてゝ處理することが出來るものである。故に國家の利益になる政治は責任ある獨裁主權者の掌理に歸しなければならない。吾人の主君は神意によりて定められたものであて、理智でなく寧ろ性情によつて統治する。

將來政權が吾人の手に歸する時一切の憲法を除去する階段として諸制度を一つ一つ取り除いて潰くものである。そして憲法政治の變更を提議する、最も吾人の獨裁政治は立憲制度破壞以前に承認されるかも知れぬ。吾人の煽動に乘る國民は屹度政權爭奪の鬪爭を惹起して自滅する……吾人は彼等を自由に頤使することが出來る。

吾人にとつて、最も危險なものは獨斷專行である。各國が敵意を抱いてゐる、此の敵意は經濟上の恐慌によつて一層高められる。吾人は自己の掌中にある金力と陰謀とによつて經濟的恐慌を起してやることに準備してある。卽ち時を期して一時に勞働者が住むに家なき有樣を作らしめる。さうすると彼等は日頃から憎んでゐる富豪の血を吸はうと思つて馳せ集り、富

豪の財産を掠奪することになるのだ。

吾人は各國の工業を破壞する方法を豫め設けてゐる。吾人が皷吹した所の贅澤的要求をますます擴げる、又益々勞銀を騰貴せしめる。此勞銀騰貴は勞働者にとつては何の利益も與へないものだ。何となれば農業畜産の衰微を名として日常品の價格を引上げるからである。吾人の謀計は中途で以て悟られない樣に表面上勞働階級を助け吾黨の經濟者の主張してゐる經濟原則を擁護するかの如く裝ふて吾人の本心を蔽ひかくさねばならぬ。而して今日食料の缺乏は各國民をして何でもかでも吾人の奴隷たることを甘んぜねばならなくする。

富といふものを大仕掛けに獨占するのは吾人の目的で、人民をば何しても無氣力に敎育させねばならぬ。秘密結社に喜んで加入するものは大抵饒舌家、射幸者即ち槪ね輕佻浮薄の人間である。彼等を利用して吾人の計畫の機關を運轉するのだ。

吾人は各國に於て政府と國との關係を紛糾せしめ內訌、怨恨、爭鬪、困苦、飢餓、病毒傳播、生活難等の武器を以て絕えず民衆を攻め拔かねばならぬ。さうなると彼等は如何にしても、吾人の金力と獨裁制に服從して來る他に道がなくなるのである。

吾人の政治は原始的で爲政者は親切を以て人民に臨み後見するのである。國民は爲政者を見ること父の如くであらふ。さうなると人民は平和安寧の生活を送るには、爲政者の親切と指導とに賴るの外はないと觀念する。斯くすれば殆ど神を敬するに近い尊敬を以て吾が爲政者を仰ぐことになる。

△世界統一

斯の如く種々の方法を以て吾人は各國を困憊疲勞せしめ、國家の勢力を手中に收めて超越政府を造る。之の大政府は各國

民を征服しなければ止まない様な大機關を具へて釘拔の如く八方へ擴がる各國の主權が全く動搖し崩壞した時に、吾人の確立する主權は何ものも之に打勝つことは出來ないのだ。何となれば吾人の主權は變化窮りなく、如何なる奸智も之を覆すとの出來ない樣になるまで何人にも判らないからである。

我等の主君の神聖なる頭に歐羅巴諸國から捧呈する王冠を戴く時には彼は世界のパトリアークになつたものである。吾人の王は世界の眞敎主となり、萬國敎會のパトリアークとなるであらう。

吾人が世界の權力を掌握した時には吾人の一神敎の外に宗敎の存在を許さない。

△結論

前項マッソン首領の演說を讀む時、吾人は彼等の周到なる用意、何ものをも逃さゞる準備、確固たる大勇猛心全世界の人類を眩惑するその手段方法等に對して轉た戰慄を禁じ得ないのである。

卽ち彼等は大自然の法則に於て到底有り得ないことを肯定しながら自由、平等、友愛の美しき標語を看板として、之を皷吹して階級鬪爭を挑發せしめ、勞働者には資本家を破壞せしめ、貧乏人には貴族富豪を呪はしめ而し兩者共に傷つき共に疲弊して遂に生活難に陷り復た立つ能はざる迄に到らしめ以て世界を攪亂の巷と化せしめてその虛に乘じて黃金の魔藥を以て凡ての民族を猶太民族の膝下に屈服せしめ、一網打盡的に世界統一の大目的を達成し二千年來の迫害に復讎せんとするのが彼等の當初よりの目的であり計畫である。卽ち彼等はマッソン大帝國の出現を理想とし步一步と進みつゝあるのである。

然るにマッソン首領も『先見の明ある王者と服從心の强い國民とが合する時は吾人にとつて最も恐ろしい敵である』と云ひ又『國家の利益になる政治は責任ある獨裁主權者の掌中に歸しなければならぬ』と云ふてゐる。故に彼等の最も恐ろしき

敵となるものは、君民國治の政體、神意によつて定められたる國體であつて、理屈や何ものにも超越した精神的極致によつて建設されたる國家である。即ち我大日本帝國がそれである。

今日猶太人が全力を傾注して破壞に導くべく努力しつつあるのは西にあつては英國、東にあつては日本である。

今や我が大和民族は興廢の岐路に立つてゐる。爆彈を抱いて噴火山上に立つてゐるのである。徒らに舞踏氣分に耽溺してゐる場合でない。クダラヌ理屈を言つてゐる時ではない。宜しく心眼を開いて建國の大精神と大理想とを信解し、我國體が大自然の法則にピツタリ合致してゐることを直視して、天壤無窮を詔し給ひし天祖の神意を奉戴して君民一致上下心を一にして世界的大國難に當らねばならぬことを自覺せねばならぬ秋である。

然るに翻て現在我が國民の狀態を觀るに徒らに物質文明に眩惑して不自然な自由や平等の解放を叫び『リベラリズム』や『デモクラシイ』や『サンティカリズム』等に中毒して放縱に流れ淫蕩に耽つてゐるではないか。

先般一網打盡的に檢擧された所謂日本共產黨の一味の如きは即ち彼等猶太人の傀儡であつて、實に大和民族の仇敵であり世界平和の攪亂者である。殊に吾人をして寒心に堪へざらしめたことは、思想の最も健實であるべき筈の東京帝國大學から非國民の最も多くを出したと云ふ事實である。又その帝大の教鞭をとつてゐた某々教授の如きは言語同斷である。先年の大震火災で東京帝大の圖書館が全部灰燼になつた時、米國の石油王ロツクフエラーは帝大總長に對し、無線電信にて何等條件なしに金四百萬圓を圖書館復興費として寄附する旨申込んだ。當時の總長古在博士は直に教授會を開いて之を協議した。その時硬骨教授眞鍋嘉一氏は「最高學府の圖書館を米國人の金によりて建設するのは何故か、さなきだに歐米崇拜の今日に更に大學生をして彼等殊に猶太人の金力に叩頭せしむるとは何事だ」と云ふ主張をして只一人反對したが遂に寄附金は受取ることになつたのである。ロツクフエラーが寄附申込の眞意が奈邊にあるかは判明しないとしても、當時已でに帝大には新人

會と稱する一派があつた。而して今日の檢擧と彼比對照する時は思半ばに過ぐるものがある。加之殘黨の所謂赤い學生達が同校内講堂に於て「學友會解散眞相發表演說會」なるものを開催して學校當局に對して不穩極まる宣言や決議事項を突付けて神聖なるべき學園を汚濁し一時的にもせよ騷亂の巷に化したと云ふことは見遁すべからざる一大不詳事であつて國家將來の爲め憂慮に堪へざる次第である。

今參考の爲學生が學校當局に提出した要求事項を摘錄する。

要求事項

一、山中湖畔の寮に於ける不正事件關係者の嚴罰要求　二、學友會理事會の專制的決議反對　三、學友會職務整理へ學生代表の參加　四、學部支部を單位とする主目的全學的學友會建設　五、諸方君の處罰の即時撤廢　六、惡取締令の即時撤廢　七、大森助教授の復職要求　八、マルクス經濟學講座の設置　九、學內言論、集會、研究組織・宣傳の自由確立　十、敎授會評議員會へ學生代表參加。

（以上の要求中六、七、八、九、十、の如きは全く共產主義思想の表現にあらずして何ぞ）

尙過般の大檢擧には東大以外各大學よりも又甚だしきは女子大學、高等女學校等よりも被檢擧者を出したることである。吾人は世界的大革命を企圖せる猶太人の魔手が斯く迄、蔓延してゐるかと想倒するとき皇國將來の爲め深憂せざるを得ないのである。

冀くは大和民族たるもの此の國家非常の秋に當り宜しく熟慮三省して以て祖國防衛に萬遺算なきを期せられんことを切望す。

▲露西亞と西比利

サヴエート聯邦を一口に露西亜革命と申しますが、それは單なるロシヤ革命ではない、ロシヤ革命と稱すべきものは千九百十七年の二月の第一次革命が露西亜上下の國民が愛國の至誠に基いて露西亜將來のため、歐洲大戰に疲れた處の國民の力を集めて奮鬪努力して、然して起つた所の革命が露西亜革命であつて、次に同年十月に起つたのがレニン革命であります。此のレニン革命はロシヤ革命ではなく、レニン主義を世界に對して露西亜を根據地として實行に着手したのであります。

レニン主義とは如何なるものかと申しますと、世間ではマルクス主義と全く同じやうに申しまするが、レニン主義とマルクス主義は相似て同じからざる一つの點であります。

マルクス主義は大體に於て資本主義が漸次膨脹發展すれば其の結果として自働的に社會的社會が現出する、之が現出を促進することが現代の使命であつて、それは唯だ單に經濟的の改革のみに依るものでなくして、政治的革命に依つて目的を達し得る、即ち階級鬪爭の階梯がそれであると云ふ。此のマルクス主義もベルンシユタインの修正マルクス主義、佛のサンヂカリズム又英のギルト社會主義と三つの分派に分れて其の系體に於ても相違點はありますが、根本要義は各國の國の特性各民族の民族傳統を其の國と民族の實狀に合するが如くにその國體に相應じ之れを促進し、さうして是等の運動を國際的の聯合に移すことを信條とするのでありませう。

レニン主義はマルクス主義を根本として虛無主義を汲み、アナキズムの無政府主義を取り入れ更に暴力を信條として社會主義を高唱し、『暴力信條』と云ふ著述までなしたる、ソレール主義を實地に寧ろより以上なる事を實行なしたのであります。レニン革命以前千九百十七年九月レニンは『國衆革命』と云ふ『パンフレツト』を出して居る、このパンフレツトの政治實

體論と云ふ所に、民衆を懷柔し、指導する爲には暴力を主とする機關を必要とする云々、又主義に反對なすものを仇敵とし之れを剿滅するためには如何なる犧牲を拂ふともなし遂げなければならない云々。

レニンが革命後十年間に所謂仇敵の剿滅をどの位なしたかと云へば、ロシヤ通信の資料によれば三百萬人と註せられ、又千九百二十一年モスクワのサヴエート機關紙の公表によりますと、革命四年間に殺戮したるものは百七十六萬六千百十八人、其の細別は敎員六千七百五十五人、僧侶一千二百四十三人、男女醫者八千八百人、一般知識階級三十五萬八千三百人、兵士二十六萬人、勞働者十九萬二千三百五十人、農民八十一萬五千人、其後ち六年間に百三十萬人を加へて三百萬人許りと云ふのであります。

サヴエート聯邦はレニン主義であります。よく世間ではレニン革命を一般にロシヤ革命と申しますが、ロシヤ革命とは二月の革命所謂第一次革命であります、十月に起つたレニン革命、之れはロシヤ革命ではない。ロシヤ滅亡の歷史であつて、世界革命の烽火であります、此の事はロシヤ第一次革命の立憲民主黨の首領として令名の馳せたる、ミリユーコフ氏の著述にもはつきりと二つに區別されてあります。

露西亞は續く戰疲と革命のため國民は極度の疲痺に達し、人心の不安は思想の動搖を生じたるを好機としてレニン主義はつけ入り、遂に同國を亡し、ロシヤを根據地として歐羅巴に及ぼしたるも、文明國は各々特性的傳統的基址を有し居るため實踐に乏しき超遷的理像主義たるレニン主義を入るゝ道理のあるべき筈はないのでありますが、露西亞と同じ運命にありました伊太利は、彼等の毒手のため崩壞の危機にひんしましたが、國民の自覺と傑士ムツソリーニの奮起にして幸に其の境を脫し蘇生したのであります。又戰敗の疲極より生れた、獨逸社會主義の內部に毒根を植つけんと彼等は全力を盡したるも、元來賢明なる獨逸民族は如何に勞倦するも獨逸精神は斯の如き建設なき破壞主義は入るべきもなく排斥され、反つて獨逸人

より弃弄され、獨逸政府はサヴェート政府に對し、貴政府の赤化共産主義宣傳は自由にされたしとの通告を發したるとのことであります。

レニン主義は歐洲侵入は大體に於て失敗に歸したのでありますが、執拗なる彼等は歐羅巴に對しては漸進主義をとり、潤浸的に畫策をなしつゝあるのであります。

西比利を根據地としてレニン主義は東漸方針をとり、外蒙古より內蒙古に毒牙を硏き、質朴なる蒙古人種は彼等の毒手に乘ぜられ惡化なしつゝあるのであります。支那は續く內亂の弱點をたくみに利用し、彼等は思ふまゝに攪亂したのであります。

吾が亞細亞西比利は今日まで吾に利なく彼に利をなす經路をたどつてゐたのであります、日清戰爭の媾和に干涉をなしたのはロシヤでありませう、然して滿洲を手に入れたのであります。此の交通物質根據地は西比利でありました、又日本が歐羅巴露西亞と戰ひまして時の軍隊、兵器、糧食、何々の輸送は皆な西比利を經たのであります。復々國體の基礎を崩壞し人心を惡化せしむる、恐るべき、レニン主義卽ち赤化共產宣傳その根據地となりつゝあるは西比利共のものであります。

豐源なる西比利は農産のみにて、輸出年額三億萬圓を下らざりしも、赤化サヴエートの魔足に蹦られ、經濟は全く破壞され、人民の生路は暗々として生死に迷ふの有様であります。西比利人は疲脊の極に達してをりますが、窮すれば通ずるの古言の如く、此の壓制が刺戟となり勇氣となりまして期せずして精神的鞏固たる團結をとり、この魔手を脫するには『戰ふも可』の勇が生れてきたのであります。

元來西比利自治獨立は、露西亞帝政時代より最も古きは十九世紀の中期にボターニン氏が唱道し繼續的に現西比利自治獨立團總裁ウエー、モラーフスキー氏と歷史的に今日に及び根柢深き親亞細亞運動の先驅者であります。ウエー、モラフスキ

ー氏が、猛然と旗幟を明かにして立ちましたのは既に機運の到來したこと丶西比利人の要求そのものであります。機は熟せりと申すのでありませう。

西比利の獨立は、時間の問題でありまして、可否を論ずる時はとくに過ぎ去つてをります、サヴエート政府は極端に行きつまり、行政、司法は實に亂脈極るものでありまして、同國民は反政府を以て充滿なし、政府部內すら赤化共產の非なることを唱ふるもの續々として現出なしつ丶ある現狀であり、又經濟の窮迫は最極なるものにて人民が食する食科の供給もとゞかざる悲慘なる狀態にて、官吏は『我れ食すれば、人死するも可』の、自暴自棄の有樣は明かに赤化政府の運命を示して居るのであります、斯る運命の萠したる時は革命又は反革命の起るは當然であります。もし露西亞に反革命起り彼地に動亂を生じたる時に西比利人が斷乎としてウラル山の鐵路『トンネル』により絕斷すれば、歐洲との交通は完全に絕たれ、西比利は孤獨となるのであります。

西比利の北部は海岸に面するといふも北氷洋にて航海便ならず、港としては浦鹽港によるの外なく、海路航通不便な地は、か丶る場合は特に考へねばならないのであります。

西比利獨立が、例へば米、英の援助によりて建設したとすれば、亞細亞民族の立場はどうなり行くのでありますか。かの富源なる西比利の開拓を、指をくわえて見て居るのでありますか、又其の開拓の下請仕事を支那のクリーと同じ其の日稼ぎをするのでありますか。幸にウエーモラフスキー氏の來朝され援助を乞はれたと云ふ事は、吾々にこの機を逸するなの意ではないのでありませんか。日之出國、細矛千足國を古言とする吾國民はモラフスキー氏一派を歡迎し、その抱負を援助し、亞細亞の親善に邁進し、亞化思想を驅除し、亞細亞人の安全を計り、然して福祉增進するが、眞の文明人の進むべき道ではありませんか。

吾政府とサヴエート政府との間に赤化共産主義の宣傳は一切なさぬと云ふ、要約のもとに協定し、同政府を承認したのであります、然るにサ聯邦は益々巧みに宣傳をなし、之れを責むれば彼は共産宣傳は第三インタナショナルのする處にてサ聯邦とは何等關する所なしとの詭辯外交を以て責をのがれて居るのでありますが、詭辯も實に甚だしいのであります、彼等は主義のために平和を得んとするのでなく、主義のために戰はんとする團結でありますから、對當に處するに形式手續のみにて誠意のある筈はないのであります。私はいたづらに兩國の親善を云々するのではありませんが、サ聯邦と第三インタナショナルとは如何なる關係を有し居るかと申しますと、第三インタナショナルは本部を露西亞中央に置き、毎年一回大會を開催し、その大會にて獨裁的權限を有する、中央委員を選出し、それ等委員により同主義の宣傳煽動機關の組織等の決定をするのであります、また其中央委員二十七名補缺二十名の內にて總ての牛耳を握つて居るのは、中央委員會の政治部員たる八名であります、その八名は何れもサヴエート政府の最高幹部、卽ちスターリン、（サ政府中央執行委員會幹部員）ブハーリン、（サ政府中央機關紙プラウダ主筆）ウオロシーロフ、（サ政府陸海軍人民委員長）ルイコフ、（サ政府人民委員會議長元レニンの職）トムスキー、（サ政府勞働組合中央評議會議長）モロトフ、（サ政府中央委員會幹部）ルズダワク、（サ政府交通人民委員長）クイビシエ、（サ政府最高經濟會議々長）である。又第三インタナショナルの主要なる各國の黨員の數は、サヴエート聯邦百三十萬、佛の六萬二千、チエツコ、スロワツキア十一萬八千、支那五萬八千、伊太利の二萬餘、其外の各國は一萬前後、斯く黨員も絕對多數を占めて居り又その幹部がサ聯邦の主要なる人物により組織されて居るのであります。如何に彼等が詭辯を弄するも事實は事實として現はれるのであります。要するに、サ聯邦と第三インタナショナルとは一體二頭を有する怪物であることは辯明の餘地はないのであります。現に日本に對しても過年第三インタナショナル第十回大會を開いた時に同黨中央委員會長たりしサ政府の最高幹部たるブハーリンは『日本共産黨の過誤を指摘し之れを指導した』と報告して居る

より見れば現在も潜行的煽動運動をなし居ることは想像し得られるのであります。

○露西亞大使館より支那官權の押收書類の內容

ロシヤ大使館より押收した文書の整理は三月餘を費して漸く出來上つた。支那本にして四十一巻となる尨大なもので、更に之を洋册二册に印刷して各國に配布しロシヤが支那で行つた事蹟を披露することゝなつたが、この文書の飜譯調査の主任たるロシヤ通の現察哈爾交涉員張國忱氏はこの編纂事業を終りその內容を總括してロシヤの支那を擾亂した罪を指摘した左の報告書を呈示した。

今回ロシヤ文書を檢査した結果、ロシヤ當局の違法行爲を發見せるもの左の如し。

一、サヴエート政府とその官吏は支那の內戰に參與して支那內亂助長を期した。

甲、サヴエート政府は經費を出し人を派して廣東軍隊と馮玉祥軍隊を指揮した。

乙、右經費は一部は無償、一部は長期貸付として供給した。

丙、右軍隊に於てサヴエート各委員は作戰を爲しロシヤ大使館附武官を參加せしめた。

二、サヴエート政府軍事密探多數を各國各省に分布した。

甲、奉天派の軍情を偵察して廣東軍、馮軍を助けた。

乙、支那の兵力經濟政治を調査し對策を圖つた。

丙、支那と各友邦との關係を探偵して離間の陰謀を實行した。

三、サヴエート在支外交商業東支鐵道その他の商工業の各機關を探偵の目的に利用した。

四、民衆風潮と武裝群集の暴動を製造して社會の安寧秩序の破壞を圖つた。
甲、土匪軍を組織した。
乙、內蒙古に民衆運動を起し該地方で武裝の隊伍を編成訓練した。
丙、紅槍會の政府反抗の擧を圖つた。
五、在支共產運動を製造し支那の社會革命を惹起した。
甲、支那共產黨を組織し金錢の援助をなした。
乙、廣東政府と馮軍隊中に共產分子を組織した。
丙、農民の共產運動を組織した。
六、恐怖政策を設け暗殺、慘殺、恐喝の目的を達した。
甲、一九二七年三月上海に於ける恐怖の擧を實行した。
乙、外交文書使者を利用して爆發物を携帶せしめた。
七、ヨーロツパ排斥運動を創製して國際衝突事業をひき起した。

サヴエート露西亞が支那に於いて從來如何なることを行つたかといふことは乃ち支那の大動亂の亂源がサヴエート露西亞にあると云ふことは右報告書によつて一目瞭然でそのやり方の惡辣傍若無人、非平和的、非人道的にして且つ頗る大袈裟なことは實に驚くべきものがある。

○赤色大學教授の講義

△日本國體の賞揚を注意

レニングラード大學東方語學課日本語教授、エヌ・イ・コンラード氏は政府の命を受け三ケ月間の日本教育界視察を終り、過般歸國したが途次哈爾賓滞在中、同市新市街白系露人の經營に係る東洋經濟學院の招聘を受け、十日間毎夜學生のため、日本社會經濟史の講義を行つた。その一日目の講義は、太古、藤原時代、鎌倉時代、徳川及明治時代に於ける日本社會の變遷を語り、更に政權が公卿より武家に、武家より再び皇室に移つた概要を説明して『日本の社會革命政權爭奪戰は屢々行はれたるに拘はらず、皇室と將軍家の區別鮮明で、決して皇位を奪取せんと企てし革命家なく、君臣の分、確然と定まれる事は他國の革命史上見るを得ざる日本國體の精華である』と雄辯を振ひ日本に關し案外智識の淺薄な露支大學生及教授等に多大の感動を與へた。

同氏は日本語に極めて巧みで、在東京、露西亞大使館のスパルウイン博士の日本語の如きは足許にも及ばない、赤色大學教授のこの講義振りに徴し、露西亞の日本赤化方針は從來に比し一段と進歩し、皇室に關する誹謗は反つて日本プロレタリアの反感を買ひ、目的達成の障害となるべきことを自覺した結果、名を捨て實をとるの方針に一變したものと解せられて居る。

○露西亞の國營商業

社會存立の動脈とも云ふべき生産及び分配の權を國家の一手に收め、國家の意志通りに生活必需品を按配せんとするのは共産政治の理想である。

サヴエート聯邦の都市に於て第一に目につくものは、生活必需品の分配たる商業を擔任して居る國營商業機關である。或は食料品コーペラチーヴ、或は金屬製品トラスト、或は國營汽船切符販賣所、或は國營ホテル、國營レストラン等悉く國營ならざるはない有樣である。この間に個人商店が肩幅せまさうに小さい看板を掲げて居る。

さてこの國營商業の商業振りを一覽するに例へば先づ靴店に這入つて誰もお早うとも、いらつしやいとも云はぬ、日本のお役所に於けると同じである。そこでお客は自分の買ひたい品物を告げると、店員は型の如く其の品をお客の前に展開する。お客が品物が氣に入らぬ樣な風をして居ても平氣である、他のものを出して見せようとするでもない。買手と賣方との間に情愛など聊かも含まれないのである。それでも兎に角女靴を一足買つたとする、求めた女は自分の足に果して適ふか何かを試して見る、ホンの少しボタンの位置を替ふれば氣持よく穿けるのだが、それを見て居乍ら店員はそのボタンを付替ふるだけの勞力を提供しやうともせない。仕方がない。

買つて歸つて慣れないことを自分で繕はねばならぬ。之れが個人商店だとそんなことがない。直ぐ修正して呉れる、愛嬌もあればお世辭もいゝ。

汽車の切符を販賣するデルトラといふ國營の店がある。店員が四五人、お客も大抵十人位何時も居る。寢臺券を要求しても、先づ辭書のやうな部厚な賃金表を繰り出さねば價が判らない。やつと判つて金を拂ふと大きな受取書見た樣なものを渡して切符は直ぐくれるのではない。切符を受取るまでには四五十分位待たされる。丁度日本で銀行に行つて何千萬圓といふ預金を出す位の手數がかゝる。賣り切れてはならぬと思つて翌日の切符を買ひに行くと、切符は明日受取りに來いといふ。翌日行つてもおいそれと渡して呉れぬ、實に厄介は事夥しい。又この店に行く爲に百哩分の汽車賃に相當する位の馬車代を棒にふらねばならぬ。

切符は日本の大封筒位のものに、何やらコマゴマしく書き立てたもので、切符の紙代だけでも隨分かゝるだらうと思はれる。事務簡捷を叫ぶ所以も肯かれる。

買物に列を作つて居るのは各所で見受けるところで別に珍しいことではない。朝など朝飯の用意をするためにパン牛乳等を買ひに來て居るのだが、第一郵便局で見るやうな小さい窓口から一人々々買ひ取るのだから暇取ること甚だしい。それに店員が仲々さばけない。それでも買手は仕方が無いと諦めて居るのか、慣れて何んともなくなつたのかニチエオー主義の先天性によるのか、平氣で井戸端會議式の談笑に耽つて居て焦れる模樣もせき立てる風もない。

△全く勞農露西亞の屬國化す

外蒙古の首府、庫倫、今ではウラン・バトル・ホト卽ち『赤色武士の都』と露西亞流に改稱されてゐるから最近歸哈した一支那商人の實地見聞談

現在の外蒙古は、全く赤露風に變つてしまつた。いろいろの制度も社會主義流、露西亞流である、軍隊は服裝も、敎練の方法も、軍規の內容も、赤軍に似せてゐるし、武器は悉く露西亞物だし、軍事敎官は露西亞人と來てゐるから、赤軍と何等變つたところがない。昔の外蒙と違つて今はもう宛然露西亞の屬國で、名實ともに支那の領土でなくなつた。

庫倫には日本商人一名、英國商人一名と少しばかりの支那人がゐる他は、蒙古人と露西亞人のみであるが、官廳の樞要都は殆どサヴエート露西亞人であるから、蒙古人でも何事によらず露西亞人の意見に聽從せねば實行できない程主客轉倒してゐる。元來蒙古人は溫和僕實まことに愛すべき民族性を持つてゐたのであるが、赤露の魔手が延びて來て、過激思想を鼓吹されて以來、その宣傳に煽動されて、固有の善良、溫順の美風を失ひ、非常に偏狹なまた驕慢な風に一變して來た。

外蒙古は露西亞風の制度、組織を採用したのはよいが、外蒙の事情に適せない政務機關や、不相應に多い軍隊の維持のため、勢ひ租稅が過重になり、一般國民の生計は一層苦難になつた。つまり舊時代よりも非常の惡政に虐げられるやうになつたので怨嗟の聲が高いが、それでも未だ迷ひの夢の醒めない輩が多い。

此の頃では外蒙に來る旅行者はいづれも嚴重な檢査を受ける。そして到る處に看視所があつて、何處でも共產黨員の命令を聽かねばならぬ。外國貿易は無論露西亞人が實權を握つてゐる。

露領後貝加爾西比利のウェルフネウヂンスクと、外蒙古首府庫倫との間には、一週二三回づつ、露西亞の飛行機が往復してゐるが、最近また數臺の飛行機を增加した。此の定期飛行は政治上、軍事上の要戰に充つるのが目的であるが、露西亞の役人や、軍人など緊急の旅行の際はいつもこの飛行機を利用してゐる云々。

また別な支那側の發表によると、外蒙は活佛時代から、新政府に至るまでに十種、三千二百萬留、その後今日まで五種、四千四百萬留、合計十五種、七千六百萬留も露西亞から借款してゐる、その借款の擔保として外蒙古内の土地使用權、鐵道敷設權、鑛山採掘權を始め、およそ外蒙古の主なる利權は殆ど擧げて、サヴェート政府のために壟斷されてしまつたと。

△歸國を嫌ふ露人

サヴェート通商代表部會計係ベヤトル・イリイチ・スプラウツェフ氏は二月四日本國政府から歸國命令をうけ引續き事務上の檢査をうけてゐたが、遂に歸國命令を拒絕し日本在住を決意したことを、警視廳外事課に出頭諒解を求め、妻ナデシタ・インドロナ・ミハイロワと相携へて二ケ月の餘の豫定で上海に旅立つた。

スプラウツェフ氏は大正五年十一月サヴェート通商代表部の會計係として日本にきたが、非黨員の故で歸國命令をうけた

ものであるが、さきに非黨員サラチンスキー元木材部副主任コロステリーフ元會計簿記係が命令で歸國したところその後、ゲー・ぺー・ウーの監視の下に本國で悲慘な生活を續けてゐる事情を知つた。そこでかれも、これがやがて自分への運命と案じ貯金二千餘圓をたよりに、妻を裁縫師に仕立てゝ飽くまで不歸國組として行動することに決意したのであると。

共產政治が如何なるものであるか、本家本元の人間すら歸國を嫌ふではないか。

○對日檄文（第三インター）

△日本を强盜呼ばはりしたる第三インター執行委員會の檄文

左記は第三インターナショナル執行委員會西歐局の名に於て、日本の山東出兵に關聯し、日本、支那全世界の勞農民族、勞働青年、陸海軍兵に向つて發したる宣言書を過年五月十八日の『コミンテル誌』第四號より、共產黨機關紙プラウダガ五月二十四日の紙上に轉載特報したものゝ要領である。

日本の山東出兵に對し强盜呼りの口汚い極端な攻撃をなし、且つ日本の勞農兵士階級に對し、共產主義的革命の露骨な煽動をなしてゐるところをよく讀んで欲しい、共產黨一派の對日惡聲は今に始つたことではないが、左の如き極端なのは過年の秋東支鐵道問題で、露支間に紛糾が起つた際、側枝的罵倒の日本に向けた時以來、約四五年目と記憶する。

支那の武力的分割運動は開始された、强盜に等しき日本の帝國主義は山東出兵を決行した、世界のブルジョアは今や干涉から公々然たる領土侵略に一轉したのである、而して日本は機先を制すべく、殊に戰略上有利な立場を作るべく山東を滿洲同樣にすべく、乃ち日本の殖民地化すべく、一步を進めたのである。

日本によつて開かれた戰鬪は世界戰亂に變ぜんとする徵候顯著となつた、ミカドの政府は米國帝國主義者に買收されてゐ

る蔣介石を掃蕩する目的で出兵したのでなく滿洲同樣、支那民衆を壓迫せんがために、換言すれば支那分割の先鞭を着けたのである、又日本國内の政治經濟界の動搖に對する勞働者の注意を他に外らし、軍閥獨裁政治を擴充せんがために、ミカドの政府は山東に於て大勝利を獲んとしてゐる。

日本の勞農兵士階級よ、支那民族の希望を達せしむべく、諸君には重大なる革命的責任がある、速かに自己の革命機關を充實し共產黨旗を揭げ有事の際變節する改革派反逆者を葬らねばならぬ。帝國主義的陣笠をして、諸君の唱ふる山東卽時撤兵の要求に從はしめよ。而して政府の命により山東に派遣されたる兵士等に對して反日本帝國主義を鼓吹し、支那革命の同志、資本主義倒潰の勇士たらしめよ。

田中の陸軍の兵士諸君、田中と云ふ專制的獨裁者は我等階級の最大の敵であり、日本に於て勞働者を足下に蹂躪し、諸君の父兄を投獄し、諸君の妻子を虐げつゝある男である。

陸海軍兵士諸君、前途の如何なる困難に對しても諸君を相扶け、同胞的革命責任を果たさねばならぬ、陸海軍兩方面より反動勢力を打破し、支那革命の保護に奮起せよ支那を紛糾せしめて後分割するのが帝國主義の奥の手である、諸君の努力を以て內亂戰を國際主義戰爭に轉ぜしめるやうに奮闘せねばならぬ。

支那革命萬歲。支那分割に着手せる帝國主義を打破せよ。日本の反革命的强盜に打擊を加ふべき黨機關健在なれ。資本主義征伐、勞働者の開戰準備事業の發展を望む、社會革命萬歲。

亞細亞主義と西比利亞(亞滿蒙問題)の解決

日本赤化運動の防止

佐藤知恭

元來日支親善の言葉は我が國の新聞や雜誌に於て常に見て居る言葉でありますが、其の元は支那人が言つた言葉であります、其の時代は何時か。それは清朝の末期であつたのです。明治三十四年頃卽ち團匪事件の後であります。團匪事件は白人が支那人を壓迫して横暴を極めたので我々黄色人はこの毛唐人を追ひ拂はなくてはならぬと云ふ原因の下から惹起した事件であるが日本人迄も遂に白人の仲間入りして了つたのであるがこの時白人が支那に加へた迫害侮辱と云ふものは實に言語に絕するものであつた。全く人類にあるまじきことをやつたのである。この時日本の兵は坐視するに忍びず之を保護せんと立つたのである。之が支那人に好感を與へ親しむべきは日本人である。日本を除いては吾々の味方はない、日支提携はこの時に起つたのであります。この時代は恰も光緒帝の時で養母の西太后が女王の如き權威を以て支那を統治して居つたのである。

之の翌年西太后は支那を强大にする方法を四百餘州の民に質し書面を以て献白させた當時武昌には張之洞が居り、南京には劉坤一、濟南には袁世凱が居つた。支那を强くするには日本を手本にせよ。日支は同文同種の國である。日本を基本にせよ、摸範を日本に取れと云ふ說を劉坤一より袁世凱の手を經て西太后の贊成を得るに到つた以後支那は留學生を日本に送り東京には二萬人も居つた。又日本からも支那に招聘せられて行つた人が五百五十人もあつた。世の中に最も大切なものは機會を把握することである、國家も亦然りであるこの機會を取ることが政治家の手腕である、日本は露西亞に大勝して急に國民が傲慢偉大になつて來て支那人を親切に指導せず却つて之を侮辱した。之が支那青年を非常に失望させしめた。日本は信賴することの出來ぬ國であると思はせた。又日本から支那に渡つて居る人々は帝大、高師、私大と相互に學閥を造て相中傷しあつた。彼は下宿の主人だ彼は賄賂を取つたなぞと攻擊しあつた。之は全く折角の支那の厚意に背いて了つた譯である。

孫逸仙が清朝の衰退した時日本に來て日本の力によりて革命を大成して愛親覺羅氏を打倒した。此の時の日本の內閣は西園寺公の時で私は當時清朝方に味方して居つた。私は或る時北京の我が公使館に行き伊集院彥吉に面會して、我々は日本の

方針に從はなくてはならぬから日本の今後の方針を詰問した時に公使は日本に打電して十二時に閣議が決るからそれ迄待てと云つたが十二時になつても翌朝又翌々日になつても其確答を得ることが出來なかつた、結局日本は無方針であつたのである。其れが事實として革命に居る人は革命の方に應援し清朝の方にも清朝に居る人が後援した、而して兩方に人を送つて所謂二股膏藥をやつて居つた、第二革命に於ても第三革命に於ても亦然りで今日迄不得要領無方針主義で誤魔化して來たのである。

この中で最も厄介な困事は常に日本は軍閥に對して露骨に應援して來た殊に寺内內閣の時に段祺瑞に對して西原龜次郎を通して貸した二億圓は如何に今日では其の利息でさへも取れない有樣ではないか、支那人から見た日本人感は要するに不親切なりと云ふことになる、而してただ單に軍閥を助けて橫暴する不親切者であると云ふ先入感念が日本に反感を持つ唯一の基因となつて居る。

私は彼等支那人の誤謬は何かと云ふことに關して過年の夏故田中首相に會ふて訊いてみた。現時の樣に支那の亂れて居る原因は一體何かと尋ねたが首相は知らないと云ふた而して私に其の說明を質したので私はそこで彼等の誤謬は要するに孫逸仙の三民主義の本旨を南方の青年が誤解して居るのが其の最大原因である之の解說を申上ぐれば、凡そ國を治むるには理想主義の方針が必要である、憲法の條文で國が治まると思ふのは法學生の言葉である、家憲がなくても家が治まるのは家風に依るからである。國家も其の通りで憲法なぞは政治の運用で其の上に無形のものがあつて國が平和に治まつて行くのである。孫逸仙の三民主義に就て云へば

第一の民族主義は外人の支那に對する壓迫を驅除して黃人種のみの支那にせなくてはならぬと云ふのである。第二の民權主義は君主專制に依らず我々は平等の權利の下に國を治めて行かなくてはならぬ。第三民生主義は製產者の製造品の仲介を

經ず直接其のまゝ消費者の手に渡る樣にせなくてはならぬ之が三民主義の要旨であるが之がよくないのである。條文やパンフレットにある樣な淺薄極まるものではない哲學的のものである。人が社會國家を成す所以のものは人間相互の思ひやりである、之がなくては百萬人あるも一粒一粒の砂に過ぎない之を堅めてコンクリートの如き樣な用をなすセメントが卽ち思ひやりである。之の思ひやりを更に說明してみると人間が此の世に生れる時には屹度誠が宿つて以て生れて來る此の誠は天より投けられたものである、故に此の誠は天道である而して之の誠が人慾に蔽はれて居るこの誠を磨いて自分の心を正しくせよ此の誠或は心ばせ之が支那人には大切であるこの心を以て支那を導いて行けば支那はよく治まるそして强國となると云ふことを故田中首相に說明したことがある。革命後孫文が上海に於て神社に詣でると忠孝の額があつたが其の內の忠の字を削除して孝のみとなつて居つた。彼は淚を流して云ふには、最早支那は天皇なき故に忠が不必要なりとしてこの忠を削除したのであらふが之は最も淺薄な思想である忠とは誠の心である。人の爲にする誠の心である、之が君に表れて忠となる。忠は君だけではない親に對しても忠でなくてはならないと慨嘆せられた。

文明國の要素は國民の素質が善良であると云ふことが第一條件である、第二は數量が多いと云ふことである孫文はこゝに力を用ひたのである。此の四億の民衆に誠卽ち誠を說いたのである。

佛敎にも大乘と小乘とがある、大乘は釋迦と自己とが合體になる敎へである、小乘は功德に依つて死ぬ時に佛に引き取られると云ふことであるが、國家にも之の大乘的と小乘的とがある。條文のみの三民主義は小乘である誠の心ばせが卽ち大乘である、蔣介石も、閻錫山も此の大乘的三民主義を知らないで小乘的三民主義を振翳して居る。斯の如き狀態であるから支那人は萬事に渡つて日本人が惡く見えるのである。昭和三年の張作霖が爆死した時に色々に取沙汰された之は日本人が犯したものか露西亞人か又支那南方の青年が犯したものか全く不明である私はあんな巧妙なことが日本人に出來得べき筈のもの

でないと思ふ。彼が乗車して居つた列車が機關車や他の列車と連結機が完全にあの様に離れて彼だけの列車が影も形もない様に微塵に粉碎されて了ふなぞと云ふことは外部に居つた日本人に到底出來得るものではない、町田少將なぞが偶然に前驛で下車する時の冗談が過々的中したので日本人なんだと流言するのであるが事實無根である。張作霖が爆死後張學良が東山省を治める樣になつた時南方國民政府との提携を見合せろと林權助男をして容喙させた之があまりにも露骨であつたから南方との不和不調が益々激烈になつたのである。孫文の大乘的三民主義の精神を以て而して其の時機を見て徐に交渉したなら圓滿に解決が付いたと思ふ之には私も賛成である。

元來政治家の本分は事の機先を制して萬事を運用せなくてはならぬのであるが、日本の政治家は民衆の背後に付いて行くから益々事を紛糾させて了ふのである。今日に於ては民衆の運動が表はれてから一歩後れて之が對策を講じようとする。一體今後の支那は何うなるか濟南事件なぞも支那人から云はせると日本が出兵したから却つて事件を重大にしあの慘たる事件を突發させたのである。責任は日本にありて支那にあるのではない又虐殺された日本人は十數人であるのに出兵の爲めに殺された支那人は二千何十人である日本が出兵したのは公明正大であるが後から支那兵を傷殺したのは日本人の落度である又殺された日本人も豫め警戒線から出てはならぬと云ふて居つたのに警戒線から敢て脱出して遂に殺されて了つたのである、殊に彼等の中には日本に歸れない質の惡い連中も居た、朝鮮の女なぞを使つて淫賣をやつたり又阿片なぞの國禁を犯して暴利を食つて居つた連中であるから語弊があるかも知れないが自業自得と云はざるを得ない。併し乍ら最も困つた問題は滿蒙との關係である、今の内に解決が付かなくては益々紛糾を重ぬることになつて了ふ。蕎麥も、豆腐も綿花も鐵も石炭も滿蒙問題が圓滿に落着しなくては杜絶えて了ふことになる、そこで此の難問を解決するには西比利亞を解決するに限る。此の西比利亞さへ何んとか解決がつけば日本朝野の士が最も烈しく恐怖を感じて居る赤化運動も防止することが出來るのである。

赤露と日本の左翼運動の連中とは實に密接な關係で結ばれて居る電報一本に依つて二萬圓や三萬圓の金は直ちに送金される様な仕掛が出來て居る。陰謀が結ばれて居るのである。この運動の走狗になつて居る連中には某大學の教授なぞも居る殊に甚だしいのになると御前講演の榮譽を擔ふて居る大學教授も居る始末である。

今日本の製產品が列國の競爭裡に於て堂々と他國の製產品を壓倒して居る理由は何に基づくかと云へば日本の勞働賃金が安いから從つて安價に物を製產することが出來得るのであるから列國の製產品よりもより多く支那に賣れるのである。之を西洋式に勞働賃金は高くなつて來ると其の結果として製產品が高價になる。製產品が高くなれば支那人は買はぬ。從つて日本の貿易は不振に落ち入ることは明々白々のことである。日本が五大强國として世界の活舞臺に雄飛して居る所以のものは上に一天萬乘の君が其の要となりて下萬民が一致協力して其の赤心を吐露して一心不亂に働くからであるこの世界無比の國體が若し赤化したなら日本は根柢から四離滅裂になり世界一の弱小國となつて了ふのである。思想善導は歷代內閣のよく口にする所であるが、今日に到るも何等其の實を上げてない。之は何故であるか、卽ち西比利亞を等閑に附して居るからである。西比利亞問題を解決したなら赤化運動も自然防止することが出來る。否赤化運動自體が自然に消滅して了ふ。赤化運動の解決は西比利亞問題の解決にあり西比利亞問題が氷解せば亞滿蒙問題も亦自然に解決して了ふ。

曾て孫逸仙が革命後日本に來訪した時山海關より以西は漢人の居る所なれば漢人種の自治に任せ、山海關以東は日本の自由に任かせると彼が云つたが今日の時勢では迚も不可能なことでこんな侵略主義なことは世人が許さぬから到底だめであるが、要するに對支間の難關の解決策としては何より第一に西比利亞問題の解決を先にして滿蒙問題を後に廻はすに越したことはない滿蒙問題が解決せばこの厄介な對支問題も解決して倂せて支那をも匡救することになるのである。

我々の進路（西比利亞を通じ赤化宣傳）

陸軍少將　多賀宗之

我が日本民族は長い間此の小さな島に住居して居つたが今後も依然として此の小島に住居して居るのかそれは迚も不可能で人口で溢れて了ふ、日本人の使命は何かなすべきである何うしても外に出なくてはならない、大陸に進んで行かなくてはならない。神武天皇の宣旨にもある通り天皇の御稜威を世界に輝かさなくてはならぬ、之が日本人の根本精神である、我々は此の精神を理論でなく之を實踐窮行せなくてはならぬ。そこで日本の國を考へて見ると日本は農が元である之までは衣食が十分に足りて居つたが農が次第に減少して之に反して人口が増加した。日本人の食料は今は外國から來て居る、東京、大阪、名古屋、神戸、横濱等の商業地だけの人口でも八百萬からある。日本だけの食物では迚も足らぬ、例へば雞卵、牛肉、鹽も他國に求め鰹節の如きもメキシコから補給して居る。若し外國から封鎖されると日本は僅か六ケ月分の食料しかない、そこでどうしても大陸から食料を供給しなくてはならぬ。又日本は漁業に於ては世界第一の國である、北海道、西比利亞沿岸は魚の寶庫である。故に我が國は之の北海道から海洲の利權を獲得しなくてはならぬ。又我が國は工業も盛んであるが、日本は英國の如く工業が盛んになつたと云つても英國は殖民地を世界各地に領有して居る、從つて工業も原料が各殖民地より來る。然るに日本は其の原料を外國から求めて居る故に戰爭の爲め閉鎖されると忽ち衰退して各都市は煙突から其の黒煙を見ることが出來なくなるのであるから戰爭でもあると全く工業は停止して了ふことになる。

元來鹽は全科學工業の原料であるが其の原料の鹽の十五萬斤の中五萬斤は外國に求めて居る。又我が國は人口が年々増加する、從つて就職難生活難物價騰貴となり今日では産兒制限を稱へる樣になつた、此の産兒制限は民族の縮少を意味するこ

とになる、民族が縮少して國家が盛んになつた例はない、戰前獨逸の如きはアフリカに盛んに移民して居つたが戰後、英國が獨逸の領土を取つたが此の獨逸人を統御することが出來ないで居る。昔から民族が縮少して國が隆盛になつたことは絕對にない、國防も食料がなくてはならぬ、此の食料は大陸から求めなくてはならぬ、大陸を國防の第一戰にせなくてはならぬ、然らば此の大陸を何處に得るか、隣邦支那か之には日支親善が必要であるが、昨今の日支關係は迚も收拾すべからざるものではないか。今日の如き關係になつて來ると日本の經濟的の影響は頗る甚大である、之の弱味を突かれて益々支那から侮辱されて居る故に日本は支那以外に大陸を求めなくてはならぬ事情に迫られて居る。

斯く考へて來ると西比利亞より外に之を求める處はない。印度は英國の領土である、故に之に手をつけることはだめである、然るに西比利亞は日本が最も近く直接に行ける私は不束にも西比利亞は歐洲の西比利亞とのみ考へて居たが、之れは亞細亞のものである、亞細亞のものである以上は亞細亞に害になる西比利亞であつてはならぬ、日露の難の如きも西比利亞を通じて日本に危害を加へんとした、赤化宣傳の如きも西比利亞を經て日本に禍を加へんとして居る。

歷史に徵して見ても熊襲を抑壓せんが爲に三韓を征伐したのである、又阿部比良夫がミシハセを征服したのも之は今の西比利亞海洲を征伐したのである、朝鮮の如きも合併してこそ朝鮮が平和になつたのである、西比利亞と日本は關係が深い、西比利亞は東洋の爲めの西比利亞でなくてはならぬ、そこで西比利亞に就ての研究が最大の急務である。

西比利亞の自治獨立に就て

西比利亞獨立團總裁　ウエー・モラーフスキー

一九一七年十一月露國に於て共產黨は第二次革命を起し共の標語として、此の地上に極樂世界を現出すべしと高唱しまし

兒は街巷に彷徨し、都市にも村邑にも住なく、食もなく、寒と饑とに斃れたるもの亦た幾百萬人なりしか、殆んど算し難き程である、又此の標語の下に十數世紀の間に漸く築き來つた文化も產業も悉く破壞しました、實に全露西亞を擧げて恰も血の海に化したかと思はるゝ程の慘狀の中に共產黨は遂に露國の政權を簒奪しました。

彼等は政權を簒奪しましたが容易に得意の極樂は現出しない、其の理由として彼等の揚言する所は第一に外國の帝國主義者が吾々の大業を妨げ、世界の資本主義者が一致して勞働者の幸福を妨げ、第二には所謂白系の兇徒等が手に兵器を揮ふて其の周圍の人民の爲なりと稱して共產黨に逆襲した、是が極樂出現の妨碍であつたと言ひます、國內戰漸く終熄し、共產黨は捷利を得、白系は敗北して支離滅裂となり、一部のものは止を得ず外國に遁逃し、遠く故鄕を離れて他國の憐憫を受け、江湖に淪落の身となりました、そして是等亡命者は共產黨の起したる祖國の國難を如何にしても解決したく唱へましたが諸外國の多くが共產黨の政權を承認することになり、同黨に取つては有ゆる障礙が取拂はれたる事故へ、爰で豫て約束したる極樂を實現すべき機會が到來した譯であります。

偖て「ソヴエート」政權樹立の後忽ち十數年を經ましたが其の政績は如何でありますか、露西亞は曾て帝政時代にあつては歐羅巴の食糧元締とも謂ふべきものでありましたが、今は自國民すら養ふことが出來ず、露國經濟界の基調たる農業は頽廢して目も當てられぬ姿となり、共產黨は紙の上にも口の先にも農業の復興と改善とを叫ぶも、實際は農業の途を妨げて退步せしめたのであります、共產黨の主張する小規模の自作は能く莫大の粒穀を產すと云ふも、實は官憲の壓迫甚しくして却て著しく萎縮し、近く「ソヴエート」政府の主席「ルイコフ」は遂に苦しくなつて本音を吐き、共產黨議に基いた農政の結果農民をして全く稼耕を樂しむの意を失はしめ、作付面積は大に減少したと言はしむる樣になりました。

製造工業も亦た何等の進境を認められざるのみならず、戰前よりも却て退步し、各專門の機械其の他の設備は酷使するのみにして修理も加へぬため自然に甚しく磨損して能率低下し、生產品激減のため國民の日常必需品の要求は殆んど之を充たすことが出來なく、去りとて自國の財政は其の回復の資源に乏しく、外國より借入金も出來なく今日は回復全く絕望の有樣であります。石炭及其の他の鑛業も同然であつて、非常に頽廢し或ものは全く廢休して居るものもあります。こんな狀態であつて露西亞の政治及び經濟の生活は何一つ大戰前の水準にも復へらず、共產黨の連中には回復の能力なしと認めらるゝに至りました、實に露國には無限の天富があるに拘はらず、今は乞食同然の狀態に墮落したのであります、從て國民一般の生活は極端に窮窘し、殊に異樣に感ずるものは共產黨が誰よりも先に勞働者に極樂を與ふべしと約したが、此の勞働者が僅少の給料で酷使せられ生活言外に困難なるのみならず、諸般の產業頽廢のため失業者が激增し殆んど頻死の苦境に在ります。

それのみならず共產黨連中が露國を經營することになつて以來は露文化の發達は偖て措て却て甚しき低下でありまして、高尙なる藝術品の損壞されたることは擧げて言へぬ程であつて、而も之が補充は一つも之なく、戰前にては人も許したる如く露國の文學も藝術も頗る優秀の程度に達しましたのが、今日は其の影さへも認むることが出來ず露國の文士作家乃至美術家にして國內に留りしものは異常の壓迫と窮窟とに攻められ幸に其の內の幾分は外國に遁逃して辛くも隱れ家を見出したものもあります、從て共產黨は此の方面の創設的識力の進展の如きは殆んど一步も誘導せしことがありません。共產黨の大將、共產黨の神と崇められた「レニン」は曾て露國民に向て「今吾人に何が不足であるか何も不足を言ふべきでない、吾々は世界何れの政府も有せざる大政權を握つたのである、實に露國人は萬能である、唯だ未だ國民生活を常軌に導き得ざるのみである、導き得ざる所以は能力乏しく文化なきが故なり」云々と言ひました全く其言の如く共產黨には能力もなく、文化もないと云ふが事實であります、然し「レニン」は一を知て二を知らないものであります、即ち國家は共產主義の組織では誰に

向つても能力も文化も與へ得ざるもので、此の組織そのものが今日共產專制政治の釀成したる亂國を整齊し能はぬものであります、そして今は全露國民が國家の前途を如何に爲せば可なりと云ふことを了解し、共產連中の內でも、亦た此の了解あつて自ら先非後悔をして居るものも多々あります。

此の亂脈極る露國を如何にせば果して再び能く整齊し得らるべきかと云ふに、何より先に第一着に共產制度を撤廢して其の專制より逸脫せねばならぬことで、是は全國民の自覺であつて、又た共產黨中にも之を思ふものがある位でありまして人人皆な其の機の熟するを待つて居ります、殊に此の希望に燃へて居るものは西比利亞であります。

偖て西比利亞住民が斯る熱望を有するものは遠く以前から相當根柢深き理由があります、元來西比利亞住民は久しき以前から自由なる生活に慣れ且つ物質上に於ても何等缺く所もなく生活し來り、從て種々精神上よりも物質上からも歐露の居民とは一種特別の民性を馴成し、自由獨立の意志が頗る鞏固でありまして、十九世紀の中頃からして、居民全般の生存條件發展のため自治的聯邦に改造すべしとの意向を生じて、爾來日一日と此の風潮が昻まり、又た此の信念が著しく强硬となり居民元有の精力と强き執着性よりして自治聯邦實現の準備に入り、一九一八年には歐露の革命に際し居民銃を手にして自治聯邦を實現したが、共產黨の赤衞軍のため擊破されて、其の政權に歸し、居民は今日まで暴政のため塗炭の苦に在る次第であります。

此の西比利亞の自治獨立に關しては恰も其の素質が眼前に橫はつて居ります、卽ち居民は何れも能く一國の國民たるべき能力を有し、又た國家を維持するに足るべき天富は全土を通し極めて豐富であつて、今日の人口が十倍すると雖も尙ほ且つ自給自足は十分であり、加之地理上より視るも歐洲各國が國を爲してゐると同樣頗る能く適當して居ります、倘し夫れ此際幸に西比利亞嫉視すべき共產黨の羈伴を脫して獨立し得たりとすれば、其の勢は響の聲に應ずるが如く忽ち歐露の諸地に反響

し「マロロシヤ」(我國にては通例之を「ウクライナ」と稱します)「ベロロシヤ」高加索、土耳機斯坦の如きは西比利亞の奮起を知るや、直に干戈を採つて猛然として「モスコー」政府に反抗し忽ち自治獨立を宣すべきは火を踏るよりも明かにして、是等の各地方は西比利亞と均しく過去數年來已に氣勢充滿して居るのであります。

實に西比利亞居民は共產黨政權の專制と暴政を掃蕩せんと欲して已に一齊に其の用意を有し、何れの日か此の擧に出でんと期して實力を養ひ、又た已に相當の實力を有して居りますが然し此の撥亂反正の業を成したる曉は忽ちにして從來百般の事體が破壞されたる西比利亞に於ては外部より急を急として精神上にも政治上にも、亦た經濟上にも多大の後援を得んことを熱望致します。精神上の事は暫く措くとしましても經濟上に就て一端を申せば、烏拉爾以東大平洋岸に至るまで到る處日常の物質―一本の釘さへも容易に得られざる大缺乏である故直に織物も金屬製品も之が供給の途を絕て、砂金、鐵、石炭の如き重要なる鑛業も非常に荒廢して居る故直ちに整理し、開發するの必要があり、農業も暴政のため甚しく衰退して居る故種子を給し農具を與へて急に其の復興を計るの必要があり、西比利亞の各都會に於ては、家屋の修理は勿論、給水、下水、電燈等の設備も亦た悉く之を整理し乃至新施設を要するもの多々之あり、國道縣道乃至鐵道も十年間修理せられず、單に酷使し來つたもの故その荒廢は言外であり、最後政治機關に要する建物も自ら新築すべきもの尠なく、要するに全西比利亞は歐露と等しく共產黨政治のため出來る丈の破壞をされたものと謂ふべきであつて今日に於て此の暴政の遺物としては夫の濫發しつゝある「チエルウオーネツ」と稱する留紙幣のみにして、而かも濫發のもの故、國內に於ても日に月に相場が暴落し、購買力は現今非常に僅少のものとなつて居ります。

斯る狀態でありますから共產暴政掃蕩の一刹那よりして直ちに外部の後援を翼望する所以であります、而して此の後援は利害關係の最も緊密なる隣邦たる貴國(日本)よく御仁與になる樣切に望むところであります、貴國の盛大なるは容易に物質

を供給し得られ、市政を改善し、鑛業を輓回し、農具其の他の供給に依りてそれを回復し、乃至は資金を適當の條件を以て供給せられんことを懇願する次第であります。西比利亞の天富は無限とも云ふべき豐富でありますが、吾々の手元には資金なく、開發の途も立ちませんから資金と同時に日本の優秀なる技術をも招來せられんことを望みます、實に日本の資金は何れの方面に於ても有利なる投資の途は數へ切れぬ程多くあります。

日本と西比利亞との親善は西比利亞のためのみでなく亦た日本のため極めて有益の事は吾々の玆に喋々するまでもなく、日本はそのため此處にその工藝品の廣大なる販路を獲て、其の鐵其の他金屬製品は勿論卓越したる纎維工業品も亦た他の日用雜貨より電氣用品の類に至るまで悉く好箇の需要を得ると同時に又た日本の各工場に於ては之に要する原料品を西比利亞に求むべく、且つ日本の爲めに食料品の一部も西比利亞より提供することが出來ます。

日本と西比利亞との親善は斯る經濟關係の外極東平和の均衡を保つ上に於て重大の意義を有し延いては支那、蒙古及び滿洲問題解決のため重要の役目を演ずるものと信じます。是等は唯だに地理上の關係のみならず國家として親善友交は双互の連鎖たるべき深甚の利害關係であります。是の故に私は此の好き機會に於て西比利亞の自治運動に向て御同情を寄せられ、西比利亞居住をして共產黨の暴政より逸脫して、眞の生活に甦生せしめられむことを貴國の諸君に只管懇願致します。

西比利亞の經濟問題

鳥居忠恕

西比利亞はウラル山から大平洋まで約四千里、面積千二百里、千三百五十萬平方キロメートルで亞細亞の凡そ四分の一を占め歐羅巴の一倍半、歐露の二倍半、日本に比べると四十倍の廣さを持つて居ります。それで人口は僅に二千五百萬に足る

か足りない位で革命以來結婚數が減少し生育も惡いから現今人口は增殖して居ないだらうと思れます。然しソヴエート政府の統計は手に入れる事が難かしく又たとへ入手しても信用する事が出來ないから確かな所は申し上げられません。さて住民の生活の狀態でありますが必ずしも西比利亞は熊や虎の巢窟ではないのでありまして、交通機關も西比利亞鐵道によつて貫通し、チタよりは分れて滿洲に入りハルピンに至り、長春以南は日本の管理に屬する南滿洲鐵道である事は御承知の通りであります。その外の交通では水路によるもので黑龍江は河口から八九里の間船が通じ、揚子江を小さくした樣な河であります。アムガラ河からエニセイ河につゞく之はバイカル湖から出て居りますが湖から河口まで船行の便があります、河は急流でないから七八百噸から二千噸位までの船が航行する事が出來それからは澤山の團平船を曳いて行きます、沿岸は大分開發されて居りますけれど、其の程度はまだあまり進んでゐるとは云へない、で彼等の住民の生活を維持する產業は何かと云へば北海道によく似て第一が農業であります。まだ木の生えてゐる林を切り開いて田畑を作り家を建てるといつた風で、木の少ない所が早く開拓せられたといふ有樣であります。ザバイカル洲はその地方の需要に應ずる丈の生產がないが黑龍江省は自給自足の狀態でそれより下れば豆滿江の朝鮮境の方はまるで開けず、食料不足で多くは滿洲から輸入します、日本から輸入する事もあります。

第二は林業で、林業株式會社がこの邊（沿海洲）にあるが中々利益が上らない、昨年は八十九萬圓の缺損でありました。之は勞働者の思想が革命以來惡化して働かないで賃金のみを貪るからであります、然し森林は無限で曾て私は西比利亞線で旅行して二晝夜半程の間森林ばかりを汽車の窓から眺めた事があります。

第三は鑛業、鐵山もあり石炭山も有ます、アルタイ山脈中の鐵鑛は六十八パーセント以上の鐵分を含んで居りまして非常に有望でありますが開發はまだ微々たるものであります。石炭坑はすぐ近くに澤山ありますから工業上大へん便利でありま

す。この鐵は全歐に供給しても百年以上續くだらうといはれて居ります。極東にも鐵鑛が多い、七十八パーセントの鐵分を含んでゐるが然し全量はアルタイの十分の一位であります、その他小さいのは所々に澤山ある、チタの附近には鐵器の製造所もあつて農且つ其の他幼稚な日常必需品位は作つて居ります。それから砂金—金は少ないが、砂金は至る所に出ます。一年の産額七千萬圓位、然しその他に澤山の盜金、使用人の持つて逃げるのがあります、それに從來の採集法が全く幼稚であるから、之を改良したら、まだまだ産額は殖えて今の倍額に達するは難かしい事ではないかと思ひます。銅は少ないから日本から供給しなければなりますまい、一括して申しますと小麥の輸出額一億圓、林産も三千萬圓乃至五千萬圓の産額を見る事は容易であり、鐵鑛も資本が豐かであれば五千萬圓や六千萬圓位はわけなしに取れます。北樺太(南樺太日本領の炭坑は僅かだが)の石炭は三千萬圓位の産額があります。その外エニセイより歐露の邊まで牧畜業が盛んで、牛が多くバタは有名であります。革命以前までは歐洲への輸出が一億五六千萬圓もありました、毛皮の輸出額も一千萬圓位で麻は何處にでも出來まして二千萬圓から三千萬圓の産額があります。栽培法等研究すればまだまだ有望であります。

要するに西比利亞の全生産額は五億を申しますが漁業(一千五百萬圓位の産額)は微々たるものでありますからこの中に入れません、西比利亞の經濟はかくの如くであります、之を利用しないのはうそです、鐵道が豆滿江からのびて行けば全く日本と陸つゞきになつてしまふのでありますから諸君の注目を願ひたいと思ひます。

ロシヤは凡ての工業が國營だから物質が不足し、一例を上げると一ヤール貳拾錢位の更紗が壹圓もしてゐてそれで需要に應じきれないといふ有樣です。だから之が自治國にでもなつたら將來日本の大市場になるわけです。

△世界の日本

神は幽界に於て間斷なく活躍作用して地球の發展進化を計りつゝあると同時に、現界方面の理想化は人類に委托せり。換言すれば神の計畫は地球の理想化にして、現界の理想化は人類の使命なり。故に幽現は相通じ、神人は相離る可からざるを原則とす。已に宇宙の力を認めたる吾人は、目に見えざるを以て神なしと言ふ可からず。神なる力を離れて寸時も存在し能はざる吾人は、神を認め、神の理想は人類の幸福にあるを知り、其の幸福は統一に因りて得らるべく、其の統一は大中心の下に行はるべきものなることを覺り、此の大事業が高御座に在ます天皇なる世界大中心に依つて完成せらる可きことを期すべし。是れ神の企劃にして、又人類の理想たらざる可からず。而して之を實現する根據として、神謀りに因つて、世界に唯だ一つ萬世一系の天皇の下に此の日本が建設せられ、且理想的世界を表現する國體を現存せられたり、而して此の日本をして世界的使命を果さしむべく、先づ君民合體の關係を保持せしめ且つ宇宙の大道たる忠孝仁義を本としたる道德の結晶たる、大和民族の精神を傳統的に發輝せしめたり。換言すれば日本は神謀りに依つて天皇なる一大中心の下に扶殖せられし神國にして、其の國民は世界を神化すべき大使命を果すべく祖先以來天皇の高御座に仕へ來たりし神國民なり。故に日本人は其の國家を護り、國體を擁護するのみにては使命を盡し得たるものに非ず、此の國家を出發點とし、根柢として、世界人類を此の一大中心に歸依せしめ、眞の平和幸福の境に導きて、救濟する大事業を完成すべき使命を有することを覺らざる可からず。斯く我が日本は現界を理想化すべき世界神化の根據地なるが故、神祐神助は獨り吾れに在つて厚く、天壤無窮の國家となりて現はれたり。

敬みて惟ふに天之御中主大神と稱へ奉る神靈は、宇宙大中心なり、此の大中心の活動は卽ち天照大神と稱へ奉る大御力にして、宇宙萬有は總てその支配を受けつゝあり。此の大御力を離れては何物も決して存在する能はず。吾々人類も此の大御力の結果に因りて生じ、且存在する宇宙の微分子なり。隨つて吾等人類は大神を離れて宇宙間に獨立し得べからざるのみならず、

此大神を吾等存在の根元、吾等が歸依すべき大中心として、絕對の信仰を捧げざる可からず。是れ迷信に非ず、又宗教に非ず、己れを宇宙の大中心に合致し、歸依せしめて、安住を求むるの道なり、又吾人の本源に向つて感謝し、宇宙の自己を認むるの道なり。

斯の如く、天照大神は日本のみの大神に非ずして、世界の大神なり。如來と唱へゴッドと稱し、其の言を異にするも、均く是れ宇宙の大中心なる大靈にして、其活動は卽ち天照大神に外ならざるなり、是れ空想に非ず。吾人は須く大なる信仰に活くべし、宇宙には吾人の本源たる天照大神なる大御力あることを覺醒して、信仰を此に捧ぐると同時に、現世界に於ける動かざる大中心を求めて吾等人類信仰の中心とし、且つ安定保障を托せざる可からず、幽現は相通ずるを以て幽界に天照大神なる大中心を存すると共に、現界にも之れを映射せる大中心なかる可からず。

凡そ人類が安定の大中心を求め得ざる間は、唯自己を恃みて自己に賴り、自己を賴りて自己を支持せんとし、自ら個々を中心とする結果、個々の間に衝突を生ずるは免れざる事なり、此の故に現代人類は、自己を主體とする個々の衝突を緩和せん爲に、各民族每に集團し、其の安定保障を托すべく、人爲的に主宰者なる一中心を設け、且つ權利義務の交換に依て、社會の秩序を維持しつゝあり。此の如く神を主體とすべき人類が主體たるべき中心を求め得ずして、自己を出發點とし、又主體とせるが故に、自ら眞の統一を缺き、互に主義主張乃至利害を異にして軋轢衝突の息むことなきは、宇宙の眞理に背ける當然の現象なるべし。然るに地球上唯だ我が日本のみは、建國の出發點が天照大神なる神緣關係に起因し、且つ國民は其信仰を此の宇宙大中心に歸依すると共に、其の照應を承け皇孫を繼げる高御座を、現界に於ける中心として絕對の信仰を捧げ、吾れを主體とせず、中心を主體とせる吾れ、中心より分派せられし吾れとして、幾千年を一貫せる歷史を有することは神の企劃に合し宇宙眞理の表現せるものなることは特に注意を要す。

岩倉具視



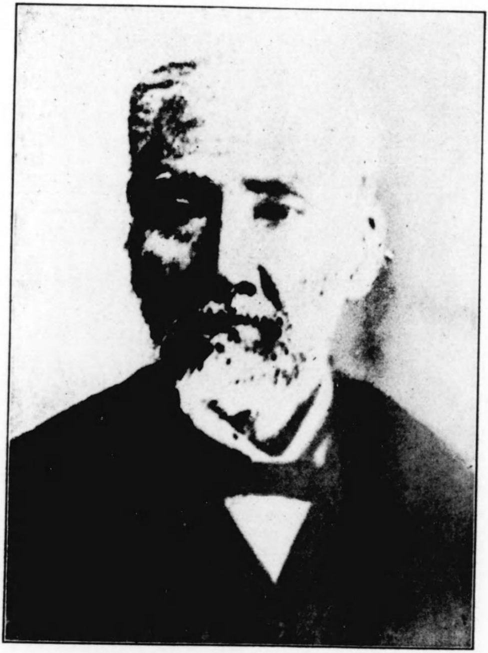
板垣退助



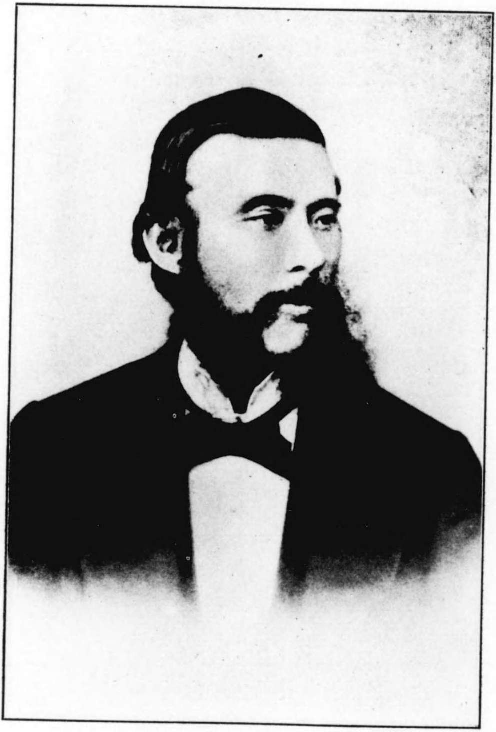
江藤新平



副島種臣



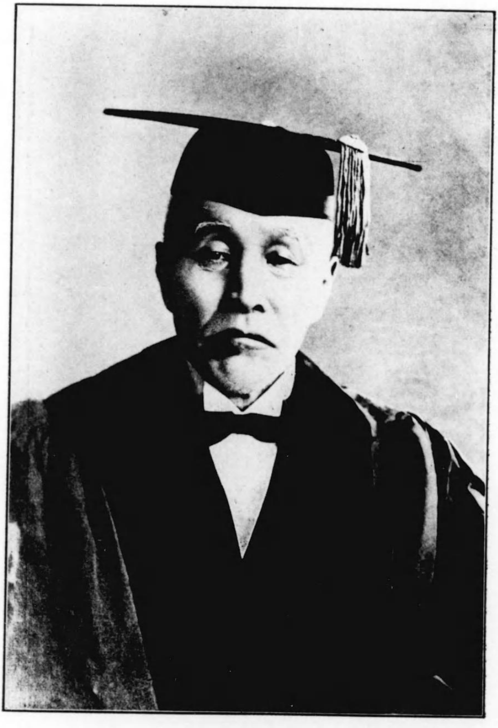
大久保利通



大木喬任



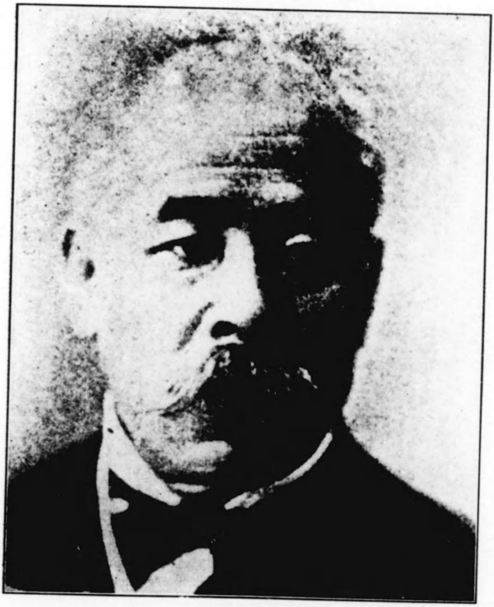
大隈重信



木戸孝允



後藤象次郎



三條實美



附錄　明治維新の元勳功臣略傳

岩倉具視

幼名は周丸、前中納言堀川康親の第二子なり、出でゝ岩倉具慶の養嗣子となる。天保九年十四歳の時元服して昇殿を許さる。安政四年從四位上に叙せられ侍從となる。資性英邁にして沈毅、夙に皇室の式微を慨し同志の人と謀り、經營劃策する所あり、是時に當りて公武合體の說盛んに行はる。具視又時勢に鑑みて深く之の說を賛し皇妹和宮親子内親王の將軍家茂に降嫁あらせられんとする幕府の政策講ぜらるゝに及び、論議紛々として或は是れ皇尊を瀆すものとして之を斥けんとす。具視以爲く、皇妹の降嫁敢て共例なきにあらず、且つや此際利害の趁く所を考ふれば、公武合體の實を擧げ、天下人心の分離を防ぐは之に如くものなし、宜しく斷然之を許すべしと、乃ち關白九條尙忠に謀る。尙忠又具視の說に贊し遂に降嫁の允許を見るに至り、乃ち和宮内親王は文久元年十一月を以て江戶に下る。是れが爲め一部勤王の士より具視を以て佐幕黨の姦人なりと目し潛かに劾奏せられ終に勅勘を蒙りて、共采邑なる洛外岩倉村に閉居する事となれり。然れども具視の心中一日も皇室を離れず、潛かに勤王の有志と交際劃策する所あり。慶應三年三月入洛するを許され尋で勅勘を赦さる。是より益々有志と共に謀り遂に明治維新の偉業を扶翼大成せしむ。

明治二年權大納言に任じ正二位に進む。四年外務卿右大臣に任ぜられ、特命全權大使となりて歐米各國に使し、翌五年歸朝す、六年征韓論の起るに及び西鄕、江藤、板垣、後藤等の主唱に反對し、斷然征韓を不可として事遂に止むに至りたり。

七年一月十四日退朝の際赤坂喰違に於て、刺客の爲めに要撃せられ負傷す。九年從一位に進み、勳一等旭日大綬章を賜ふ。十一年大勳位に叙せらる。十六年七月二十日病を以て薨ず、享年五十九。天皇深く悼惜し給ひ廢朝三日に及ぶ。二十三日勅して太政大臣正一位を贈られ、二十五日國葬を以て南品川海晏寺なる岩倉家の墓域に葬る。同時に其遺髮を具視の舊居なる京都洛外岩倉村の地に瘞めて瘞髮碑を建てたり。

具視また政治以外、諸種の事業を經營し、嘗て奏請して光明天皇の御代に創建せられて後久しく廢絶に歸したる學習院を再興し、同族の子弟を敎育せしめ、又華族銀行を建てゝ同族の生產を確固たらしむ。西南の戰役に際し同族に諭して官軍の傷病兵を賑恤し、又婦女に命じて綿散絲を造らしめて之を戰地の病院に寄贈す。或は日本鐵道會社を創興し、或は華族の倶樂部を設くる等、其用意の周到を見るべく、而して又永久に其功績の沒すべからざるものあり。

板垣退助

諱は正形、幼名猪之助、舊高知藩士板垣正成の男、天保八年四月十七日生る。戊辰の役、征東大總督府參謀に任じて奥羽に出征し、若松城を陷る。亂平ぐに及び參與に任じ、二年從四位參議となり、功を以て賞典祿千石を賜ふ。六年西鄕隆盛等と共に征韓論を唱へて廟議の容るゝ所とならず、同志袂を聯ねて野に下る。翌年副島種臣、後藤象次郎等と民選議院設立の建白をなして又容れられず歸朝して立志社を創立して大に自由民權の說を唱ふ。八年三月大久保利通に招かれて復び參議に任じたるも幾もなく之を辭し、愛國社を設けて益〻自由民權論を唱導す。十三年國會開設請願有志會を大阪に開き、併せて愛國公黨組織を宣言す。後更に自由黨を組織して各地に遊說すること最も努む。途次岐阜に於て兇徒の爲に傷けられしが、幸にて傷癒ゆ。十五年後藤象次郎と共に歐洲に遊びて政況を視察し、歸朝後愈〻力を政黨に致す。二十年維新以來の功に依

り華族に列し伯爵を授けらる、退助再三固辭すれども遂に聽されず。二十三年立憲自由黨を組織し、その總理に推される。後伊藤博文と提携して、其内閣に入り内務大臣となる。幾もなく瓦解す。三十三年大隈重信等と共に憲政黨を組織し、ついで協力して内閣を組織し内務大臣となる。黨人和せず遂に尾崎文部大臣の後任問題に關し、大隈總理の處置を横暴なりとし辭職を奏請して又野に下る。之より幾もなく意を政界に絶ち、專ら力を社會改良事業に注ぐ。退助と重信とは實に明治憲政の發達に與りて最も力ある者なり。

江藤新平

肥前の國佐賀の人、南白と號す、世々鍋島侯に仕ふ、明治維新の際國事に奔走盡瘁して功あり、後文部大輔となり、次で五年司法卿に任ぜらる。新平法典に精通し、司法に任じて以來鋭意法律の制定に腐心し、明治三年以來行はれたる新律綱領を改正して改定律令を發布するに至れり、尋で參議に任じ、六年征韓論の起るに及び西郷隆盛等と共主張を共にし大に征韓の可なるを論じたるも廟堂に容れられず爲めに遂に冠を挂け野に下れり。翌七年歸縣するや、同縣の門生等に擁せられ二月島義勇等と倶に遂に兵を起して佐賀城に據る。是に於て官軍の征討する所となり連戰皆利あらず、新平自らその抗すべからざるを知り衆に告げて曰く、吾今鹿兒島に赴き西郷隆盛に投じて救援を乞はんと欲すと。衆之を危み止むるも聽かず鹿兒島に抵り隆盛に倚る。隆盛之を拒む。依て已むなく四國に遁れんとて宇和島を經て高知に抵る。途甲浦に於て遂に縛に就く。次で佐賀に護送せらる。同年四月二十三日、罪を判じ斬に處せられ佐賀に梟せらる。大正五年四月に至り、舊罪を赦され特旨を以て正四位を贈られたり。

副島種臣

佐賀の藩士、幼名は二郎、蒼海と號す。文政十一年九月生る。夙に藩黌に入り、大隈八藏と共に秀才を以て稱せらる。幕末元治・慶應年間脫藩して交を四方勤王の士に訂し、尋で大隈等と共に大政奉還の事に盡力し、王政復古に與り功尠からず、元年三月徵されて參與となり、制度事務局判事に任ず、福岡孝弟と共に創始の官制々定に功多し。翌年前原一誠と共に參議に任ず。四年五月嘉永以來懸案たる樺太境界劃定の使命を帶びて露國に使す、當時の勅語よく朝廷叡旨のある所を窺ふべし。

> 我國魯國と壤土最近し交誼最厚ふすべし殊に樺太地方の如きは彼我人民雜居往來各其利を營む之を保全するの道に於て豈心を盡さゞるべけんや曩に嘉永五年魯帝全權使節を派し經界を定めんことを議す而れども互に事故ありて其議成らず爾後慶應三年に至り彼得堡に於て假りに雜居の約を結べり　朕竊に方今樺太の形狀を察するに言語意脈の通ぜざるより民心疑惑或は爭隙を生じ怨讐を醸し遂に兩國交誼の際懇親の意を失ふに至らんか是經界を定むるの最も急務にして獨　朕の深く憂ふるのみならず魯帝も亦嘗て大に心を勞せし所なり因て爾種臣に命じ委するに全權を以てし往て經界を定むるを議せしむ爾種臣其れ機宜に從ひ其事を正し兩國人民をして其慶福を保たしめ且つ以て公誼の益々厚く永久渝らざらんことを是朕が深く望む所なり爾種臣厚く斯旨を體せよ

種臣仍て外務小丞田邊太一を從へ、露領ポシエツト灣に赴く。多く得る所なくして歸る。歸朝の後幾くもなく參議を辭し、改めて外務卿を拜す。種臣仍て露國のアラスカを北米に賣却せるに倣ひ樺太を我に買收するの議を建つ。大藏卿大隈重信之を贊したれば、翌五年自ら露國代理公使ビソオフを自邸に招きこれを謀る。事稍々成らんとして開拓次官黑田淸隆の反對起り、廟議急に一變して遂に千島樺太交換說に逆轉す。此年祕魯の商船支那賣奴搭載事件に關し、その橫濱に碇泊中彼の非理

を諭して賣奴を其本國に還さしむ。六年三月、臺灣蠻族、琉球の漂民及小田縣民を刦殺せる事件につき、特命全權大使として清國に派遣せらる。

種臣清國駐剳公使柳原前光を副として北京に至り、遂に生蕃地の清の版圖にあらざるを確認せしめて歸る。於是征臺の役あり歸朝後再び參議に任じ、外務省事務局總裁を兼ね、幾もなく征韓論起りて意見を同うするものと共に野に下る。後、後藤象次郎、板垣退助等と民選議院設立の建白を呈して容れられず、爾後多く政界に意を絶ち風月を友とす。九年再び支那に遊びて山水の勝を探り、李伯と詩酒徵逐して舊交を溫む。十六年君命辭し難くして宮內省に出仕し一等侍講を兼ね、献替する所頗る多く、信任殊に深し。種臣病を以て骸骨を請はんとするや、上侍臣をして親書を傳へしめて曰く

卿ハ復古ノ功臣ナルヲ以テ朕今ニ至テ猶其功ヲ忘レス故ニ卿ヲ侍講ノ職ニ登庸シ以テ朕ノ德義ヲ磨ク事アラントス然ルニ卿カ道ヲ講スル猶淺クシテ遂未タ其敎ヲ學フ事能ハス比日來卿病蓐ニ在テ久ク進講ヲ缺ク仄ニ聞ク卿侍講ノ職ヲ辭シテ去テ山林ニ入ントス朕之ヲ聞テ愕然ニ堪ヘス卿何ヲ以テ此ニ至ルヤ朕道ヲ聞キ學ヲ勉ム豈一二年ニシテ止マラン將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス卿亦宜ク朕ヲ誨ヘテ倦ム事勿ルヘシ職ヲ辭シ山ニ入ルカ如キハ朕肯テ許サヽル所ナリ更ニ望ム時々講說朕ヲ賛ケテ晩成ヲ遂ケシメヨ

と、天恩の渥き誰か感激せざるを得んや。されば十八年十二月、伊藤が新官制に依りて第一回の內閣を組織せんとするに當り、切に入閣を慫慂したるも遂に出でず、十九年二月宮中顧問に轉ずる迄、よく君側に侍して啓沃の任に當れり。二十四年松方內閣の選擧干涉善後策に困むや懇請せられて內務大臣となれるも固より種臣の本志に非ず、幾くもなく退いて樞密院に入り爾來二十年、常に樞府に隱れて出でず。三十八年一月三十一日七十八歲を以て薨ず。朝廷勅使を下して幣帛を賜ふ。

大久保利通

幼名は利濟、通稱正助後一藏と改む。甲東は其號なり。薩摩の藩士次右衞門の子、天保元年を以て鹿兒島に生る。幼より沈毅寡言長ずるに及んで容貌魁偉、人望みてこれを畏怖す。西鄕吉之助、大山格之輔等と互に相往來して交最も深し、後隅元某に隨つて佛書を講じ、坐禪三年大いに自得する所あり、藩主賢明にして鋭意治を圖る。甲東窃に上書して權臣を斥け壅敝を開かんことを論ず、言甚だ剴切なり。隆盛と共に用ひられて徒目付となり、將に爲すあらんとするに臨み齊彬薨じ、久光入りて嗣忠義を輔佐するに及び、權臣再び用ひられ、隆盛譴せらる。久光齊彬の志を繼ぎ文武を治め經世志す。甲東屢、その近侍に托して時務を論じ遂に擢でゝ小納戶に擧げられ累進して側役となる。乃ち說いて隆盛を召還し共に藩の樞機に與る。

時に幕府外國と互市貿易を開き、四方有志の士連りに攘夷を唱へてこれを論難し、一代の風潮外人を視ること禽獸の如し、爰を以て遂に生麥の變あり、英公使之が處置を求むる事甚だ急、因りて幕府薩藩に命じて爲に償金を容れしめんとす。時に隆盛は京都に、甲東は京攝の間に奔走す。乃ち甲東吉井幸輔(友實)と共に大阪に至る。幕府の元老之に面して速に償金を英人に容れ以て事を隱便に計るべきを諭す。利通佯りて耳聾せる爲め、驚き問うて曰く、幕府將に薩藩を討たんとするか。吾藩既に用意あり、謹で之を迎へんと。元老再三之を辯ずれども利通聞かざる爲め、遂に逆上を辭として退き出で、愴惶歸る。玆に於て藩主命を下して邊海の防備を嚴にす。

既にして勤王攘夷の說益、四方に紛起し、公武の間漸く離隔す。利通藩主の內意を受けて京師に出で、公武の間に周旋し、一致して以て攘夷の偉勳を成さんとす。幕府の有司因循にして事を難んじ朝廷の公議亦動もすれば阻格す。甲東輙ち久光の

意を啣み、小松清康（帶刀）等と東西相應じて内は謀議に參じ外は志士に交遊し、死力を盡して事に從ふ。久光の建議する所多く施行せらる。玆に於て薩藩の威名天下に震ひ、甲東の聲譽亦大に顯はる。慶應三年幕府の再び長州を討たんとし、諸藩に出兵を命ずるや、甲東主として征討の名なきを陳して之を拒む。既にして征長の軍敗衂を重ね、幕府の權威全く去りて諸藩之を重んずるなし、玆に於て朝廷大に雄藩を徴して國是を議せんとす。先之甲東屢、岩倉具視の幽居を訪れて親交を訂し、相與に國事を議し密に謀議を樹つ時に會桑二藩幕府の威を籍りて朝議を蔑如し公卿を凌辱す。久光之を匡正せんとし止むなくんば兵力に訴へて決せんとする志あり。乃ち甲東をして長藩に至り、盟約して共に事に當らんことを謀らしむ。甲東仍て國に歸ると揚言して窃に長藩に至り、毛利侯父子木戸孝允と會し、藝州侯亦加はり、互に謀議を通じて歸る。三藩の兵既に大阪に向つて發し、朝廷亦密勅を薩長二藩に下して幕府を討たしめんとす。會、土佐の山内豐信、その臣後藤象次郎を遣はして大政返上の說を將軍慶喜に慫慂せしむ。甲東亦小松清康と共に其議を賛す。慶喜その說を容れて遂に政權を奉還す。

慶應三年十二月、朝廷斷然復古の大號令を發し、改革を決行するや、甲東與りて最も力あり、卽ち參與に任ぜらる。元年聖上大阪に行幸し、遂に車駕を東京に進めて駐す。皆甲東の發意する所に係る。既にして木戸孝允版籍奉還の議を起す、甲東大にこれを賛し、共に其議を土肥兩藩に慂慫し、遂に郡縣の基を定む。二年七月參議に任じ、九賞貴典祿千八百石を賜ひ從三位に敍す。利通上表して之を辭すれども聽されず、因て之を勸業寮の費途に献ず、是歲十二月朝廷亦利通を鹿兒島に、木戸を山口に遣はす。島津侯病を以て朝せず、大參事西鄕隆盛代つて上京す。利通仍て木戸、西鄕と共に高知に赴き、大參事板垣退助を伴ひて上京し、遂に廢藩置縣の事を決行す。甲東隆盛と議して曰く、政の惡しき多頭に出づるにあり。宜しく一人を推して首となし、相扶けて事を行ふべしと、因て孝允を推す、固辭して受けず、又隆盛孝允を並べ任ぜんとす。共に諾す。朝廷卽ち二人を參議に任じ、甲東參議を罷めて大藏卿に任ず。

四年岩倉右府に副として孝允・博文等と共に歐米に使す。十一月八日を以て東京を發し米國に赴く。翌五年三月一度歸朝して條約改正の事を建議し、尋で再び米國に赴く。是より普く歐米を巡遊し、六年五月孝允と共に先づ歸朝す。蓋臺閣征韓の議起りて紛々爲に召還せられたるなり。甲東以爲、方今の急務内治に在り未だ外事に及ぶに遑あらずと、岩倉右府と共に共不可を極論し孝允、博文亦議を同うす。遂に具視と共に職を辭せんことを請ひ、隆盛以下冠を挂けて去るに及び即ち出でて事を視る。

七年一月江藤新平、島義勇等佐賀に叛く、甲東自ら激發する所と爲し、請うて自ら赴きて之を鎭す。先之四年臺灣の生蕃琉球の漂民を殺し、六年又小田縣の民を劫かして財を奪ふ。於是又征臺の論を發す。既にして支那政府は征臺の事を以て不當と爲し抗言す。八月利通勅を奉じて全權辨理大使となり清國に赴く。勅語に曰く

『此節清國使命の儀は不容易大任苦勞に候へども素より國家の重事汝任に克ゆるを信ず宜しく　朕が意を體し盡力あるべし』

甲東總理衙門に至りて談判を開く。論辯數次決せず、利通怒りて將に旗を捲いて歸らんとす。英公使ウエード衛門の囑により共間に周旋し、終に五十萬兩を我に償ふの議決す。十一月東京に歸るや、都下の民家毎に國旗を掲げて利通の歸朝を祝す。天皇優詔を下して共功を賞す。曰く

汝利通臺灣蕃地の擧あるや清國と大に葛籐を生ずるに方り辨理大臣の重任を奉じ往て其事を理せしむ汝克く朕が旨を體し反覆辯論遂に能く國權を全ふし交誼を保存せしむ是一に汝が誠心を盡し義を執て撓まざるの致す所なり嘗に朕が心を安ずるのみならず實に兆庶の慶福たり共功大なりと謂ふべし　朕深く之を嘉尚す

八年大阪議會の盟により木戸、板垣等參議に任ず、甲東共に大に力を内治の改善に用ゆ。九年五月主上共邸に親臨し賜ふ

に優詔を以てす（木戸に賜はれる文と同じ）時人以て榮寵と爲す。十年天皇京都に行幸し尋いで肥藩の變起る。利通二月を以て京に赴き專ら征討の事務を督す。既にして事平いで歸京す。ついで朝廷西南の役の功を論ずるに當り故に利通に及ばず、別に佐賀臺灣の事に託して之を賞す。蓋し甲東の苦衷を憐みてなり。

汝利通曩に佐賀縣の暴動あるや速に鎭靜の功を奏し臺灣の擧重任を奉じ淸國に赴き克く其事を辨理し兩國の和平を得たり

朕深く其勳勞を嘉尙す仍て位一級を進め且前日授くる所の旭日大綬章に年金七百四十圓を附與す

十一年五月十四日將に朝せんとし途に淸水谷を歷・兇徒あり甲東を車上に刺す。薨ず、年四十九。兇人闕に至つて自首す。加賀の人島田一郎、長速豪等六人なり。嘗て鹿兒島の黨人と往來す、甲東政權を壇にし士民を抑壓するを疑ひ遂に爰に及ぶ。天皇變を聞きて震悼し、天顏懌ばざるもの數日、翌日勅使を其邸に遣はし、右大臣二位を贈り幣帛を賜ふ。

忠純許國。策鴻業平復古。公誠奉君。贊丕績于維新。剛毅不撓。外時殊勳。英明善斷。內奏偉功。洵是股肱之良。實爲柱石之臣。、玆聞溘亡。曷勝痛悼。仍贈右大臣正二位。併賜金幣五千圓。

大木喬任

佐賀の藩士權五左衞門の長子、天保三年を以つて生る。幼名民平天性沈毅寡言事を執る公平愼密幼より學を好み、長ずるに及んで才識愈高く、夙に藩中第一の人物として各藩の間に喧傳せらる。德川氏の末年深く時事を慨し、江藤新平等の同志と共に勤王の大義を唱へ國事に奔走す。王政維新の初召されて參與に任ぜられ大隈、後藤等と共に兼外國事務局判事となる。幾くもなく東京府知事、東京府大參事を兼ね、三年民部大輔に轉じ、爾來參議、民部、司法、文部、敎部等の諸省卿大臣に歷任す、就中司法省にあつて新律制定、法典編纂に與りて功勞多く、最も文政の確立に功あり。九年熊本神風連の暴動及前

原一誠の亂あり、裔任命を奉じ、九州臨時裁判所に於て國事犯罪者を審判處斷す。後元老院議長樞密院議長等に累進し、十七年勳功に依り伯爵を授けられ、十八年從二位に叙す。三十二年九月病んで薨ず。年六十八。

大隈重信

幼名八藏佐賀藩士大隈重保の男。天保九年二月を以て生る。幼にして藩黌弘道館に經書を學び、後轉じて蘭學を修め又國學を蒼海の兄枝吉杢助に受く。修學數年の後擧げられて蘭學寮の教授となる。當時藩黌に新舊の二派あり、重信は大木民平、江藤新平等と共に新派に屬し、大に舊弊打破、藩政改革、兵制革新を企てたるも藩吏の容るゝ所とならず僅に商業策のみ用ゐられて長崎に商館を設立す。後自ら長崎に出でゝ英人フルベツキに英學並に數學を學ぶ。尊攘の海内に喧噪するや、重信副島種臣等と共に大政復古の大義を唱へ、脫藩して京阪の地に奔走す。既にして藩吏の捉ふる所となり謹愼を命ぜらる。元年正月擢でられて九州鎭撫總督副參謀となり幾もなく參與に任ぜられ外國官副知事を兼ぬ。時に贋金交換問題起り各國公使頻りに其處分を迫る。重信乃ち會計官御用掛となり之が處分に與りて功あり。二年春會計官副知事に任じ、後外國事務局判事たり。當時耶蘇教禁止問題に關し、英國公使パークスに面して遂に各國の干涉を拒絕す。爾來神祇時務局御用係參議大藏大輔等に歷任し、此間大阪造幣局の創立に與り、又工部大輔伊藤博文等と謀りて鐵道電信の創設に盡力す。朝廷その功を賞して勅語並に劍一口を賜ふ。六年井上大藏大輔の文部司法二卿と意見合はずして職を去るや、重信卽ち大藏事務總裁を命ぜられ、始めて歲計豫算表を作りて之を公表す。翌年征臺の師起るや、蕃地事務局總裁を命ぜられ、功に依り又勅語を賜ふ。曩に臺灣の擧あるや汝重信事務長官の任を盡し日夜黽勉能く之を總理す朕其功勞を嘉す。

十年大藏卿に進む。翌年車駕その第に臨み一家に拜謁を賜ふ。此年八月竹橋の兵士異動を起しその襲擧を受く。蓋西南戰

役後兵士の給料削減を行へるに因せるなり。十三年専任參議となり、尋で內閣に分科を設くるに當り、會計及外務の兩科を兼掌す。翌年開拓使官有物拂下事件及國會速開事件に關して薩長閥係の連盟排擊を受け、遂に職を辭して野に下る。河野敏鎌、前島密、矢野文雄以下共に職を辭する者甚だ多し。卽これ等の同志と共に改進黨を組織して總理となり、且つ早稻田に專門學校を設立す。

二十年華族に列し伯爵を授けられ正三位に敍す。翌年春黑田の元老內閣に入りて外務大臣となり、井上の失敗して中止したる條約改正の事に從ひ、二十二年締結の事漸く成らんとして世論沸騰しこれが中止を唱ふるもの甚だ多し。重信亦形勢の不可なるを見十月遂にこれを中止す。此日閣議よりの歸途兇徒に要擊せられて隻脚を失ふ。十二月職を辭す。二十九年夏再び外務大臣に任じ幾くもなく職を辭す。翌年板垣の自由黨を組織し、三十一年入りて憲政黨內閣を組織す。蓋我國政黨內閣の嚆矢として人目を新にする事頗る大なりしも、久しからずして兩黨の聯合破れ十一月瓦解す。天皇勅して特に大臣の禮遇を賜ふ。爾來野にあり憲政本黨總理として專ら政黨の指揮に盡し、ついで之を去るや、早稻田大學總長として育英を事とする傍ら、國民の政治的敎育と外客に對する日本の辯護とに意を用ひその功頗る大なり。大正三年政變に際し推されて再び內閣を組織し同五年辭職す。後大勳位を授けらる。大正六年病を以て薨ず。時に年八十七。

木戶孝允

本姓は和田小字は小五郞、幼時桂氏に養はれた桂小五郞と稱す、松菊は共の號、山口藩士なり。同藩士吉田松蔭に兄事し、後江戶に遊びて劍を齋藤彌九郞に學び、精力群を超ゆ。廣く諸藩の名士と交はりて略海外の事情に通じ、憂國慷慨の志氣を碎勵す。その國老に準じて藩政に與るに及び、藩主の命により改めて木戶準一郞と號す。

尊攘の論天下に囂しきに當り、松菊出でゝ京師に遊び、廣く有爲の公卿と交はり又諸藩の識者と遊びて竊に天下の志を懐く。幾もなく甲子の變あり、京師に於ける長人の勢全く地に墜つ。松菊獨り京師を去るに忍びず、物色愈々急なるに及んで逃れて丹波に奔る。

偶々長藩の激論黨俗黨を倒して幕府に對するに當り、藩主松菊を召して大監察に任ず。松菊乃ち村田藏六を擢でゝ兵制を洋式に定めしめ、大に藩政を整理して廣く各藩の名士と計る。土佐の坂本龍馬竊に薩長の阻隔を歎き、既に薩の西鄕大久保を說き又來つて松菊を說く。藩主遂に京師の薩邸に赴き謀らしむ。於是薩長の調和全く成る。

復古の業成るに及び、元年正月松菊徵されて參與となり、總裁局顧問となり、薩の大久保と並び立つ。此時に當り松菊竊に以爲、列藩割據今日の如くんば維新の名ありて實虛しく、天下の事竟に爲すべからずと。乃ち請うて藩に歸り、藩主に說くに宜しく藩籍を奉還し、復古をして名實全からしめざるべからざるを以てす。藩主これを可なりとし、時に隨つて之を斷ずるを許す。松菊感泣して拜辭す。元年九月松菊車駕の東幸に陪して東京に至り、大久保利通と一日天下の大勢を論じ、因て說くに版籍奉還の急を以てす。利通亦大いに之を贊す。土肥の二藩亦封土奉還の議あり、明治二年正月薩長土肥の四藩遂に版籍奉還を請ひ、爾餘の諸藩亦皆これに倣ひて割據の弊爰に改まり、維新の大業初めて其實を全うするを得たり。而してこれが創意者は實に孝允なりき。

二年七月參與を解いて待詔院學士に任じ、尋で九月詔して維新の功臣を賞す。松菊賞典祿千八百石を賜ひ、從三位に敍す。三年復參議に任じ、四年十一月大久保と共に岩倉具視に從つて歐米に遊び、具さに制度文物を視て六年五月又甲東と共に先づ歸朝す。巡遊中の觀察に基きて大いに内政を整理せんとし、企劃する所多かりしも、偶々征韓論の破裂によりて臺閣に一大動搖あり果さず、七年一月文部卿を兼ね二月佐賀の亂起り、内務卿大久保利通出でゝ征するに及び、又内務卿を兼攝す。

亂罷んで幾もなく又征臺の議起る。孝允これを非とし、議遂に合はず病を以て官を辭し鄕里に歸臥す。當時孝允の太政大臣實美に上れる書中に曰く、朝鮮臺灣の事起るに及び、臣謹で下問に奉答し、政府の義務用兵の方略兩ながら其宜しきを得ざるを論ず、已にして征韓の議を止め、新に內務省を興し、天下をして顯然朝旨のある所を知らしむ、不幸にして九州の變起り、干戈俄に邦內に動く、是亦征韓の論の其禍を成すものなり、變亂僅に定まりて未だ幾日ならず、臺灣の事又起る、夫國威を海外に張り、版圖を異域に聞く、國人の情に於て豈之を喜ばざらんや、臣懦弱なりと雖も快を一身の上に取らば亦將に鼓鞞の下に踊躍し、砲石の間に奮迅せんとす。誠に思ふ政府の務國人心より起る。而て本末內外の辨あり緩急先後の序あり、今國內三千萬の人民、未だ大に政府の保護を蒙らず、蒙昧負戾の人權利を持するを得ず、國の國たる未だ知るべからず。(中略)斯の如くして底止する所なく內外緩急の序紊、亂るれば、天下の心將に渙然解散せんとす。臣實に恐る朝廷の憂たる者、唯外藩の民殘暴を被る如きに止らざる也と。松菊內の治を主とする征韓論以來曾て易らざるを見るべし。征臺の事局を結ぶに及び、大久保大に內治に力を用ゐんとし、伊藤博文をして山口に就いて木戶を起たしむ。於是七年十二月の大阪會議となり、翌年一月松菊板垣と共に再び參議に任じ、兼ての宿志に基いて元老院、大審院を設け、又地方長官會議を開いて自らその議長となる。先之優詔松菊に下る。曰く

前日來　朕屢、汝に歸京を命ず汝病の不癒を以て懇々之を辭し夙其職を解かんことを請ふと雖今や國家の要務親く汝に諮詢せんと欲する者多し朕切に汝の力疾して歸京せんことを望む乃ち特に東久世侍從長を遣し朕が旨を諭さしむ汝其之を體せよ

九月朝鮮の暴徒我が軍艦を砲擊するあり問罪の議起る。松菊自ら事に當らんと請へるも病篤くして果さず、朝鮮事件局を結ぶに及び、九年三月參議を辭して內閣顧問となり、宮內省出仕を兼ね、君側に侍して献替する所多し。此年四月天皇親し

く孝允の第に幸し、特に勅語を賜ふ。

汝孝允維新の始より國事に鞅掌し今や幸に平安に屬す之汝等輔翼の功に因る所なり　朕玆に親臨し偕に歡を盡すを欣ぶ

六月車駕に陪して東北を巡遊し具さに民の疾苦を尋ねて以聞する所多く、又中央集權の餘弊著しきを觀、窃に立憲代議の制を樹つるの必要を感じたり。十年二月西南の事變起るに當り、松菊又陪從して京都に在り、自ら請うて征討の任に當らんとし病の故を以て許されず。五月病漸く篤し。天皇親しく其の旅館に臨んで慰問し給ふ。二十五日勳一等に敍し、二十六日遂に薨ず年四十四。勅して正二位を贈り、翌年孝允の殊功を錄して嗣正次郎を華族に列し、尋いで十七年侯爵を授けらる。二十二年憲法發布の事あるや、特に勅使を其墳墓に遣はして之を告げしめ給ふ。蓋松菊夙に立憲を以て志と爲せるを以てなり。贈位の勅宣に曰く

公誠忠愛。夙傾心于皇室。獻替規畫。大展力於邦猷。贊維新之洪圖。褒中興之偉業。功全德豐。有始有終。洵是國之柱石。實爲。朕之股肱。玆聞溘亡。曷勝痛悼。因贈正二位。併賜金幣。宣

後藤象次郎

幼名を保彌と呼び、舊高知藩士助左衞門正晴の長男、天保七年三月生る。幼より卓落不覊、好んで書を讀む。吉田東洋に師事し頗る成人の風あり。交る所概年長者にして儕輩と伍するを欲せず、佐々木高行と常に相往來して善し。擢でられて郡奉行より近習目付となりしが、文久三年辭して江戸に上り、大島圭介の門に入りて英學を修む。居ること三年歸りて大監察となり、藩の機務に參ず。後長崎商法係となりて該地に赴き、坂本龍馬に會し、鎖國攘夷の國是を論じて深く結び、又西鄉隆盛と往來して、土薩の間を彌縫し、國政改革を約す。尋いで龍馬と共に大政奉還の議を容堂に勸め、更に幕府に建白せん

と欲して歸藩す。容堂乃ち象次郎をして福岡藤次等と共に大政奉還の議を齎し、上京して書を幕府に致さしむ。象次郎閣老板倉伊賀守に面して之を呈し、尋いで二條城に慶喜に謁して具に天下の大勢を論じ、政權返上の止むべからざるを力說す。慶喜これを可とす。此の年十二月參與職に任ぜられ、元年外國事務係兼總裁顧問に任ず。次で大阪府知事に任じ四年參議に任じ、工部大輔を兼ね。次で左院議長、左院事務總裁を兼攝し、六年征韓論の起るや、論爭容れられず、西鄕、板垣、副島等と共に冠を挂けて野に下る。これより板垣等と謀つて民選議院設立の意見を建白し、又蓬萊社を組織して專ら海外貿易に從事す。八年元老院の置かるゝと共に入りて議官、副議長となりしが、翌年之を辭して實業に從ひ、又板垣等と自由黨を興し、十五年共に歐洲に遊ぶ。二十年華族に列し伯爵を授けらる。此年大同團結を唱へて政論界に大飛躍を試み、遂に二十二年三月黑田內閣に入りて遞信大臣となる。これより山縣內閣、松方內閣、第二伊藤內閣に列なり、二十七年官を辭す、三十年八月病んで薨ず、年六十。天皇特に侍臣を其第に遣はし、勅宣して弔慰せしむ。

王政復古大義を痛論し以て群疑を排し皇國回天の偉業を翼賛し以て國是を鞏くす膽略機宜に應じ勳名時流に超ゆ今や溘亡を聞く曷んぞ軫悼に勝へん茲に侍臣を遣はし賻賜を齎し以て弔慰せしむ

三條實美

梨堂と號す三條實萬の子なり、天保八年二月京都に生る。嘉永二年從五位下に叙し、安政元年從五位上に任敍し昇殿を聽さる。文久二年從三位權中納言に累進す。此時に當り攘夷の國論沸騰し、騷擾益〻甚だしきを加ふ。實美議奏使となり、詔を奉じて江戶に至り攘夷の旨を達す。三年朝廷親兵を徵し實美を總督となす。既にして文久三年朝議俄然として一變するに至り、東久世、三條西、壬生、四條、錦小路、澤の六卿と共に逃れて長州に走る。所謂これ七卿落にして實美その筆頭なり

き。實美夙に愛國忠誠の情に富み、王室の式微を慨し復古の志熱烈なるものあり、同志と共に長州三田尻に蟄居中、猶皇室を想ふの念は一日も去らずして左の詠あり。

大君は如何に在ますと仰ぎ見れば
高間の原ぞ霞こめたる

長州に在る三年慶應三年に至り幕府大政を奉還するに及んで、實美召されて京都に歸れば、孝明天皇は既に崩御ましまし月輪殿の陵墓月冷かに照す、乃ち詠じて曰く

悲しきや歸りて見れば月の輪の
御影は早く雲隱れたる

明治元年正月副總裁議定職に任じ、尋で外國事務總督を兼ね大納言に任じ、右近衞大將に轉ず、江戸に下り關東監察使となる。五月右大臣に任じ輔相兼八洲鎭將たり。同三年太政大臣に任ず、六年病を以て官を辭す、然れども優詔聽し給はず、九年勳一等旭日大授章を賜ふ。十一年賞勳局總裁を兼ね十二年更に修史館總裁を兼ぬ、十五年四月大勳位に叙し、十七年公爵に叙す、十八年内閣組織の刷新に際して、太政大臣を辭し、内大臣に任じ尋で辭職す。十九年一月勤勞を賞せられて終身年金五千圓を賜はる。十二年十月假に總理大臣を兼ねたるも幾干もなく辭す。二十四年二月十八日病革まるや、聖駕親しく其病床に臨御あり正一位に叙せられ同日遂に薨去す、享年五十五。朝廷爲めに朝を廢する三日、東京音羽豐島岡護國寺に國葬す。實美の如きは實に誠忠愛國の外、私心なく永く明治維新の元勳として仰がる。

實美また和歌を善くす、左に其一二を錄す

年浪を數へて見れば諸手にも

みつる隅田の秋の夜の月

紅葉ばの照すゆふべは玉鉾の
みちのくまさへ迦らざりけり

水石契久(勅題)

ことしより御池の水も動きなき
巖と共に幾世すむらん

西郷隆盛

舊鹿兒島藩士。幼名は吉之助南洲と號す。資性朴訥剛勇果斷、藩主齊興痛く之を愛し、近習役となす。壯にして江戸に遊び、水戸の藤田東湖の俊傑を聞いて之と交はる。東湖その不世出の天才なるを観、之を景山公に薦めて共主島津公に請はしむ。島津公辭して遣るを肯ぜず。之より吉之助の名識者の間に隆し。嘉永中京都に入るや、勤王僧月照と交はり、近衛關白の密旨を奉じて屢、水戸に往來す。因て月照と共に頗る幕府の忌む所となり、逃れて薩摩に歸る。偶、藩主齊彬薨じ久光、忠義を擁して立つ。藩吏幕府を憚りて阻む。遂に相抱いて海に投ず。隆盛獨り甦る。時に安政五年十一月望。之より名を改めて菊池源吾と稱す。物議騒然たり、藩吏忿、之を憚りて又大島に流す。隆盛大島に竄せらるゝこと爰に三次仍て大島三右衛門と稱す。居ること二年、久光上京國事を謀らんとし、隆盛を召し還して樞機に參せしむ。之より京阪に往來して畫策する所多く、殊に薩長の舊憾を解いて竊に幕府に當らんことを盟ひ、以て丁卯復古の基を置く。慶應三年十二月朝廷雄藩を徵して復古を議す、隆盛、利通等と參畫する所多し。參與に任ず。

戊辰の春朝廷征東大總督府をして東國を征せしむ。隆盛大參謀を拜し、進んで品川驛に達す。三月十三日幕府の海軍奉行勝安芳、單騎高輪に至りて隆盛に面し、德川慶喜恭順の狀を述べて征討の師を停めんことを請ふ。隆盛城池兵材軍艦を容れ、慶喜水戸に退きて謹愼すべきを條件として之を納れ、一兵をも江戸城に入れしめざらんことを諾す。於是幕府二百三十餘年來の首都刄に衂らずして之を朝廷に收むるを得たり。兩雄の交懷雄識に因らずんばあらず。既にして東北を征し悉く平ぐ。朝廷將に隆盛を參議に任ぜんとするも固辭して受けず、飄然として故山に歸臥す。二年隆盛の勳勞を賞し祿二千石を賜はる。

三年十一月朝廷勅使を下して毛利島津二公を召さしむ。島津久光病を以て入覲するを得ず、隆盛をして代り朝せしむ。利通と共に山口に至り、又孝允を拉して高知に赴き、板垣退助を伴うて京に入る。六月孝允と共に參議を拜し正三位に敍し利通退いて大藏卿に任ず、幾くもなく岩倉、大久保、木戸以下皆外遊す。五年七月陸軍元帥を兼ね、近衞都督の事を行ふ。ついで陸軍元帥に任じ、參議を兼ね遂に陸軍大將に任ぜらる。維新後元帥大將に任ぜらるゝ者之を初とす。これより御親兵の編制、廢藩置縣の斷行、軍制の創定、宮廷の改革等概ね皆隆盛の威望に依りて成る。殊に宮廷改革の功を最も偉なりと爲す。六年十月征韓論起るに及び議合はず、病と稱して冠を挂け、再び鹿兒島に歸臥す。朝廷屢〻召せども就かず、隆盛に心を傾くる者疑惶動搖す。朝廷特に陸軍武官に勅諭して曰く

西鄕正三位病氣に付辭職の趣あつて參議近衞都督差免し尤も大將如舊申付置たり元より國家柱石と依賴致すの意に於て渝ることなし皆〻決して疑念を懷かず是迄の如く職務を勉勵せよ

尋で賞典祿を辭すれども朝廷許さず、因て之を以て鄕里に學校を設け藩の子弟を敎育す。十年二月遂に私學校の徒に擁せられて賊名を負ひ、九月二十四日流丸に當り倒れ、別府新助その首を斬りて土手に埋む。二十二年本官を復せられ、尋いで三十五年五月隆盛當時の偉勳を思召され、特に息寅太郎を華族に列し、侯爵を授けらる。

會規

一、本會ハ國體擁護會ト稱シ本部ヲ東京ニ置キ必要ノ地ニ支部ヲ置ク

一、本會ハ國體變革ヲ防止シ國益ノ增進國粹思想ノ向上ヲ計ルヲ以テ目的トス

一、本會ハ會報「護國」ヲ發行シ會員及贊助員ニ頒ツ

一、本會ニ入會スルモノハ紹介ヲ要ス

一、本會ニ理事及幹事若干名ヲ置キ會務ヲ掌理ス

一、本會ノ經費ハ有志ノ寄附ヲ以テ之ニ充ツ

以上

昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月五日發行

【非賣品】
昭和六年版

編纂者　國體擁護會

東京府荏原郡大崎町上大崎五二九
發行者　名越竹城

東京市神田區三崎町三ノ八九
印刷者　鈴木赳武

東京市神田區三崎町三ノ八九
印刷所　株式會社明章印刷所